
WING 哀しみの翼

千歳ミドリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WING 哀しみの翼

【Nコード】

N0938S

【作者名】

千歳ミドリ

【あらすじ】

500年の時を経て、空に浮かぶは二つの月。

遙か昔に翼を墮とした人間と、神に近付き過ぎた赤い月。

世界を救うのは“人外の力”をその身に宿した7人の若者たち。

十字架を掲げ宿命を背負い、少女は歩きだす。

交差する思い、突き刺した信念、伝説は語り継がれる。

向かうは希望か絶望か、異世界ファンタジー。

1 - 1 出逢い 樹海の中の大聖堂

見渡す限り真っ白な部屋でラン・エイミアードは目覚めた。

ギシリ、小さなこの部屋にたったひとつ置かれているソファが軋む。

ああ、いつの間にか眠ってしまったのか。

まだ夜明け前だろうか、それとももう昼間なのだろうか、この部屋には窓がないから時間の感覚が掴めない。

いや、正しくは塞いだのだ、窓を。

衿元のリボンタイを結び直してから、上着を手に取り手早く着る。

フードで長い銀髪を隠す。

この世界で銀色の髪はひどく珍しいらしい。珍しいというより、忌み嫌われているのだ。

ソファに立てかけておいた細長い槍状の棒を掴む。

細かな装飾の付いたそれは自身を守る唯一の武器、棒剣。

明かりを消して部屋を出ようとした時、壁の細かな傷を見た。

爪痕、へこんだ壁、赤黒い小さな染み。

いつか白くなるだろうか。ランは得体の知れない不安感に襲われながら、部屋の扉を乱暴に閉めた。

「来ていたのか、ラン」

白い部屋を出た先にあるリビングルームにその声の主はいた。

リアン・ハルコート。この家主であるその男は鋭い漆黒の瞳を眠そつに細めている。

ちようど帰宅した頃だったらしい、軍人であるハルコートはその仕

事着である軍服の上着を脱ぎながらランに近寄る。

「ごめん大佐、勝手に入ったよ」

「構わないさ。どうせあの部屋はお前の部屋のままだ」

「帰るのか？少し待ってくれば誰かに送らせられるが」

「いいよ。そろそろ汽車も出るし、自動車より速いから」

ハルコートの申し出を断ってランは歩を進めた。

この国の首都に位置するこの街の中心街にほど近いこの屋敷は、家主が不在がちではあるが先ほどまでランが眠っていた白い部屋よりは屋敷全体に生活感はある。

目覚めてからずっとして胸騒ぎは何なのだろうか、もしかしたらずっと前から胸騒ぎはしていたのだろうか。

「大佐、魔族の動きとか何か変化があったら…」

「ああ、すぐに知らせよう。それと少佐から薬を預かっていたが、見つけたか？」

「テーブルの上にあったやつでしょ。ありがとって伝えといて」

ランはひらひらと手を振ってこの小さな2階建ての屋敷の外に出た。まだ日は昇っていない、薄暗い空に浮かんだふたつの光を見た。

十数年前から続く世界の混沌、根源なら分かっている。

空に浮かぶ白銀の月、寄り添うように浮かぶ紅の月。それはあつてはならない光。

私が普通の人間と違うというのなら、いつも見上げているあの仰々しい絵画の中の天使のような翼を与えてくれないか。

そうしたら哀しみとか憎しみとか何も無い世界の果てに飛んでいけるというのに。

ランはそんな都合のいいことを思いながら街の中央ターミナルへ足を向けた。

しばらくしたら太陽が顔を出し始めて、ランの濃紺の瞳を射した。

一晩明けても戻らないトラブルメーカーに憤りを覚えるシスター、ラキア・アグネスは大聖堂3階の廊下を靴音を響かせて歩いていった。向かうはトラブルメーカーの彼女の私室だ。もしかしたら帰ってきているかもしれない、そんな淡い期待を抱きながら。

「ラン？帰ってきてる？」

ラキアは扉をノックしながら所在を確かめる。ラン・エイミアードの名を呼びながら。

「ラン様ならまだ帰ってきてないかと思えますよ、シスター・アグネス」

「…そうですね、もう日は昇っているのに。今日は用があるって言うておいたはずなんですけど…」

ちょうど廊下を通りかかった年長のシスターに改めて不在を突き付けられたラキアは軽く不満を呟いた。

するとその年長のシスターがラキアの後ろ側、廊下の向こうを細めた眼で見据えた。あら、と小さく声を漏らして。

「なにやってんの、人の部屋の前で。シスター・ラキア・アグネス」廊下の向こうから歩いてくる長身の女。銀髪を揺らし眠そうな眼を更に細めている。

ああ、ご帰還だ。そう心の中で皮肉を呟いてラキアはいわゆる上司であり友人でもあるその人に笑顔を向ける。

「あら、とんだご挨拶ね、ラン。あなたがなかなか姿を見せないから様子を見に来たっていうのに」

語気を強めて言葉を交わす二人の間に火花が散るように刺すような空気が流れ、お互いに睨み合うラキアとラン。

さして背の高くないラキアは長身のランを見上げる形になり、大きく鋭いその眼に見下ろされると圧倒されそうになるが負けじと睨み返す。

そもそもランは目付きが悪すぎるのだ、聖職者だというのに。

ラキアのはあ、というため息を合図に睨み合いもほんの数秒で終わった。

「ずいぶん遅かったわね。それでも心配したんだから」

「ちよつと気分が悪くなつたから大佐のところに行ったよ、何か急ぎの用でもあつたっけ？」

「もう！今日はランに逢わせたい人が来るって言うてあつたじゃない」

「…あ」

眠そつな顔のままランは間抜けな声をあげた。この少女がやる気を出しているところをラキアはいまだに見たことがない。

もう5年の付き合いになるがいつだって仕事内容の把握はしてないし、大聖堂に一日中いることすら珍しい。

大抵外の樹海にふらつと出ていくか、列車に乗ってこの国の首都の方に出掛けているのだ。

「あー…眠いから寝かせて。客だつてまだ来てないでしょ」

「ちよつとラン…!!」

止めるラキアを余所にランは早々に自室に入つて行った。

が、それも束の間。大きな音が部屋の中から聞こえてきたかと思えば青ざめた顔をしたランが再び部屋から出てきた。

「駄目、寝れない。礼拝堂にいるよ」

「それならまずシャワーを浴びてきてちょうだい。すごい汗よ」

待っていたかのように放つたラキアの一言に、ランは一瞬嫌な顔をして再び部屋に戻った。

しばらくすると部屋の中から勢いよく水が流れる音がした。ランの自室は備え付けのシャワーがあるのだ。

その後客人が来るまで自分の仕事をしていたラキアは、ちょうど大聖堂の真ん中に位置する礼拝堂を通りがかった。

ずらりと並んだ長椅子の壁寄りの端に座って天井のステンドグラスを眺めるランがいた。ロングスカートに包まれた脚と脚の間に棒剣を抱えて。

彼女の腰まで伸びた長い銀髪は少し濡れてはいるが、本人はさして気にしていない様子でぼーっとしている。

ノースリーブのドレスシャツの衿元にはいつも通りリボンタイが結ばれていて、ずらりと伸びた細長い腕は青白いほど。

左腕にはこれまたいつも通り、黒い手袋。

そろそろ礼拝者が増えてくる時間だ、ラキアはランの元へ行こうとしたが歩みを止めた。その時ランの頭に分厚い本が落ちたからだ。

「痛っ！」

「ラン、そろそろ其処をお退きになるかせめてしゃんとなさってください。礼拝にいらっしやっただ方には貴女のそんな姿は見せたくありません」

「シスター・ジェーンかあ。せつかくそろそろ寝れそうだったのに、痛いよ」

ランの真後ろには初老のシスター、ジェーンが立っていた。どうやら頭に落ちたのは教えを説いた教書だ。

「そんなに寝たいのなら外に出たらどうです、今日は良い天気ですよ」

「そっか。そうするよ」

「ただし、後でちゃんと仕事をするんですよ」

「…うげ」

ランは長椅子から腰を上げて軽く伸び、傍らに置いていた神父服と同型の聖服を羽織る。

それが通常の神父服と違うところは、色がグレイであることと、彼

女のその銀髪を隠すために衿周りにフードが付いていること。
ランが棒剣を肩に担いだら、ちょうどラキアが近くに来たところだ
った。シスター・ジエーンはゆっくりとした足取りで懺悔室の方へ
向かっている。

「あ、ラキア。ちょっと外で寝てくるよ」

「えっ、ちよっと、大聖堂にいてって言ったじゃない！」

「もし私が戻らなかつたら呼びに来てよ、西の湖にいるから」

ランはそう言っただけでひらひらと手を振りながら外と直結している礼拝
堂の通用口へ歩いて行った。

聖服の長い裾を揺らし、身の丈以上の長い棒剣を肩に担いで。

樹々の間から射す陽の光に眼を細めながら、樹海の中をジル・リン
プスは目的地に向かって歩いていく。

一体ここは何処だろうか。昼前にリオンの街の駅に着いたが、目指
す場所は街の中ではなく隣接する樹海の奥地だと言うじゃないか。
別に方向音痴ではないはずだが、こんなに入り組んだ樹海を誰が迷
わずに通れるというのだ。

もう太陽は頂点から下りはじめている。

顔にかかる鬱陶しい金の髪をかきあげて、ジルはその端整な顔を歪
めた。

「一体何処にあるんだよ、大聖堂ってのは」

そもそもジルがこんなに縁のない場所に来ているのは、6年振りに
連絡をしてきた幼馴染に呼ばれたからだ。

逢わせたい人がいる、と手紙には書かれていた。

それより何故ジルのいる場所がわかったのだろうか、故郷を出てから一度も逢っていないし、実際見つかるはずもないと思っていた。背負っている剣のずっしりとした重みは慣れてはいるが、休みなく歩き続けているとさすがに堪えてきた。

不機嫌極まりないジルはそのまましばらく歩みを進めていると、視界の先に開けた空間が見えた。違う景色だ。

「大聖堂！じゃねえじゃん…」

とうとう辿り着いたかと思ったら、そこは湖だった。ジルは久々に見る開けた景色に安堵した。

「もういい、少し休も…」

背中 of 剣を下ろし、ジルは湖のほとりに寝転んだ。

良い天気だ、このまま少し寝てしまおうか。ジルはそんなことを思い始めていた。

グサリ、突然ジルの頭の真横に装飾のされた棒が突き刺さった。鋭利ではないものの、驚いたジルは閉じかけていた瞼を見開いて真上を見た。驚いた、女じゃないか。

「…誰？」

寝転がるジルの真上に立っていたのは眠そつな顔をしている女。突き刺したのは彼女の棒剣だった。

棒剣、刃を持たない槍のような武器であり、護身用に使われると聞くが実際に持っているのを見たのは初めてだった。

「ジル。おねーさんは？」

「ラン」

おどけたように問いかけるジルに名を名乗るラン。

この女：気配がなかった、そうジルは思いを巡らせながらもランを見上げるその表情に焦りはない。

「あんだ、人間？」

「人間じゃなかったら何に見えるんだよ」

「そっか、悪かったね。最近は何物騒な奴らがうろついてて、間違え

「たんだ。何か、少し違う感じがしたから」

ランは謝罪とはあまりにも結び付かない横柄な態度でジルの真横から棒剣を抜く。

神父のような丈の長い上着を羽織ったランは銀色の長い髪をかきあげてジルから遠ざかっていく。

少し違う感じ、そうランは言った。まさか知っているのか。

ジルは起き上ってポケットから煙草を取り出す。火を点け、ゆっくりと煙を吐き出した。

それから、戯れにも似た気持ちでジルは己の持つ特異な能力の片鱗をその身から放出させた。

それは赤い殺気をまとった炎でできた蛇。

瞬間、その殺気に反応してか遠くへ行きかけていたランが血相を変えてジルの方へ向かった。

キインツ、二つの物体がはじき合った音。振り下ろした棒剣を剣が防いだのだ。

「おねーさん、穏やかじゃないね」

「穏やかじゃないのはあんたでしょ。ただの人間じゃないね」

笑みを絶やさないジルにランは冷たい視線で対峙する。

「少し訳ありのただの便利屋だよ。まさかおねーさんがそんなに反応するとは思わなかったけど」

「あんたみたいなのがこんな処に何の用？ここには樹海と古めかしい大聖堂しかないよ」

「その大聖堂に行きたいんだって。呼ばれてんの、そのシスターに」

「え、もしかしてあんたラキアの客人…？」

「お？なんで知ってたんだ？」

その言葉を聞いてランはジルから間合いを取った。今度は正面を向いていたので彼女の首から下がる長いチェーンの大きな黒い十字架

のネックレスが見えた。

「まさかラキアの客人が能力者だったなんて…」

ランは構えた棒剣を下ろし、ため息交じりに呟いた。
能力者？なんだそれは。

その時空高く昇っていた炎の蛇がジルの右腕に落ち、火傷するわけでもなくその腕に形を留めた。

「あなたの能力、試させてもらうよ」

「ちよつと待て。驚かないのか、これに」

「別に。私も同じ」訳あり」だから」

再び構えたランにジルは炎をまとう右腕ではなく鞘から抜いた剣を向ける。ランの言った言葉の意味をうまく掴めない。

訳あり？俺と同じ特異な能力を持っているとでもいうのか、そうジルの頭を考えがよぎった。

軍事国家ネイディアの北西部に位置する港町リオン。

その町並から外れた樹海の中にはるか昔から大聖堂は建っている。

ランは、この大聖堂で育った。

(痛いな…左腕)

棒剣を握る右腕とは逆の腕にはいつも黒い手袋がはめられている。

それは手の甲から二の腕までの長いもので、他人の前で外されることはほばない。

先ほどランが自室で眠ろうとした時も異常なほど左腕が痛んだのだ。
原因なんて、わかっているようで、わかっていない。

目の前に飄々とした態度で佇むその金髪金眼の男は、立ち上がると見上げるほどの長身だった。

例えばこの男が、長い間待ち望んだ能力者だとしたら、力を試してみてもいいかと思った。
というよりも、ただ暇だったのだが。

「いきなり何なんだ。だいたいあんたシスターだろう?」

ジルはランの首から下げられている鈍く光る黒い十字架のネックレスを顎でしゃくって言う。

「まあ、聖職者には変わりはないね」

「とんだ聖職者もいたもんだ」

「褒めてくれてありがとう」

表情一つ変えずにランは構えた棒剣を振り下ろした。ジルは咄嗟のところで避けたが、啜えている煙草の灰が落ちた。

「あつぶね、煙草落とすところだった」

この男からは、あの人と同じ匂いがする、ランはそう思った。

(血と、煙の匂いだ)

その所為かはわからないが、どうにも真剣になれない。

心の奥底の方にある恐怖心が、やっと見つけた”同類”への仲間意識か。

この男だって本気で闘っているわけではないだろう。

ジルの黒い細身のロングコートは前留めの金具が全部留めてあり、首から太ももまで全て隠されている。細いパンツもふくらはぎまでのゴツゴツした革のブーツも全て黒く、ひよろりとした黒い蛇みただ。

右腕に絡みついた炎もまた、蛇の形状をしている。よく見たら、彼の構える剣の柄にも蛇のような装飾が見える。

そういえばこの男はラキアの知り合いだと言っていた。

…ラキアは蛇を祀る民族の出身だ。

「あんた、その炎…もしかして、6年前のサリヤスの…」

ランがそう言いかけた時、初めてジルの金色の瞳が鋭く光った。その瞬間、剣が振りかざされ、ランは棒剣で受け止めたが衝撃に耐えきれずに背後の樹に叩きつけられた。

「…っ、馬鹿力っ…」

一瞬ひるんだランは衝撃でびりびりとする全身を起こし前を見据えたが、もうそこにジルはいない。

間合いを取り、右腕を構えるジルが見える。

「ちよっ…!!」

炎の蛇が、渦になって向かってきた。

無駄だと思いながらも棒剣を構えたが、ランの視界を埋めたのは、白。

緋ではない。

その白は、ゆつくりとスローモーションで地面に崩れた。

ランの視界が開ける。

歪んだ顔をしたジルが見えた。

スローモーションは続く。

「ラキア!!!」

ジルの声が響く。

もう、彼の瞳には鋭い狂気は消えていた。

彼の足元には短くなった煙草が落ち、煙が細く燻っていた。

1 - 2 忘れがたき夢の形見

もうずっと、思い出すことはなかったはずだ。
これは鍵をかけて沈めたはず、暗い暗い底の方に。

6年前の、緋い、記憶。

『サラ、アリア。そろそろ村に帰るぞ』

俺は山あいのある村に生まれ育った。

あの日、2人の妹と幼馴染のラキアを村から少し離れた場所にある
花畑へ連れて行ったんだ。

『ちよつとジル！あたしも帰る、こんなところにか弱い女の子をひ
とりにしないでよ！』

『ラキア、か弱いつて…痛っ！』

ラキアの脚が真っ直ぐに上にあがって、前を歩く俺の背中にその爪
先が綺麗に突き刺さった。

俺とラキアは同じ年で、生まれた時からずっと一緒に育ってきた。

それは15歳になったこの時も同じで、俺達と、俺の弟妹はいつも
一緒だった。

村の外は危ないから、と教えられて育った。

俺の家は古臭い剣術道場で、村の若い奴らのほとんどが親父の弟子
だった。

もちろん俺もそのひとりだったし、同じ年代の連中と比べたら俺は
そこそこ強い方だったけど、それでもまだまだ子供だったのだ。

それを嫌というほど味わうとは思ってもみなかった。

『お父さんつたらどこへ行くのにもジルと行きなさいって言うのよ。
あたしだってもう子供じゃないんだから、ジル以外に守ってくれる
人だっているかも知れないじゃない』

『ああ、酒屋のフォズとか？』

『嫌よフォズなんて！ジルに一回も勝てたことないじゃない。あたしはね、もっと頼り甲斐があつて、知的で…そうね、背の高い人がいいわ』

『うわ、そんなに理想高いといつまでも結婚できねえな。親父さん泣くぞ』

『うるさいわね！』

ラキアは村長の一人娘で、大切に育てられていたのだが、どうしてこんなに夢見がちに育つたのかはわからない。

この頃は俺もラキアも同じくらいの背で、きつと世の中で起きているであろう事柄を同じような目線で見っていたんだろう。

こつちの世界は平和で、聞かされる危険な話は違う世界、だと。

俺の生まれ育つた村、サリヤスは土地こそあれど、技術の発展は遅く、歴史や慣習を重んじる民族的な面が強く、軍事国家ネイディアに属するものの、国軍とは睨み合いが続いている。

サリヤスは旧王族派だと、親父が言っていた。

ネイディアは150年前に王制が廃止され、現在の軍事政権となつたらしい。

歴史を重んじるサリヤスは要するに全てが古臭いわけで、いまだその体制に溶け込めないでいるわけだ。

だからこそ余計に世界の混沌にも気付けなっていたのだ。

『ジルお兄ちゃん、これね、ラキアお姉ちゃんが作ってくれたのっ』
末の妹のサラは6歳。

俺と同じ金髪を揺らしながら、同じ金の瞳を輝かせて、頭の上に乗っている花冠を嬉しそうに見せてくる。

『おう、よかつたなサラ。よく似合ってる、可愛い可愛い』

『えへへ。アリアお姉ちゃんも作ってもらったんだよ』
11歳のアリアは瞳は同じ金色だが、髪の毛は母親譲りで赤み掛かった黒だ。

アリアは同じような花輪を首にかけていて、俺が頭を撫でてやると嬉しそうにくしゃっと笑った。

4人で並んで村までの道を歩く。

もう日が暮れ始めていて、太陽が今日に終わりを告げるため、空を紅く染めながら沈んでいく。

この日の夕焼けがやけに変に奇妙な色を帯びていたのは、今でもよく覚えている。

『あれ？』

『どうした、アリア』

『シユウが走ってくるよ？どうしたのかな』

シユウはアリアの双子の兄だ。だから俺の弟ということになる。そのシユウが村へと続く道の向こうから走ってくる。

俺はアリアに言われて遠くを見据えたが、シユウの表情は焦って歪んでいるように見えた。

『兄ちゃん！大変だ！！村が…村が…！』

『…村がどうした？』

その後シユウの口から出た言葉に、俺は走り出した。

魔族に襲われた！！

魔族。

人間と同型の姿形をしていながらも、殺戮や破壊行動を好み、まるで獣のように命を貪る種族。

彼らは遙か昔に戦争が終結した時に突如姿を現し、人々を恐怖に陥れた。

浅黒い肌や尖った耳、鋭く伸びた爪が特徴的で、有する戦闘能力に至っては一般人など比ではない。

俺がようやく村に到着したとき、既に戦況は散々だった。

血を流し倒れる者、息絶えた者、負けじと魔族に立ち向う者もいた。この時世だ、今までも何度か魔族の襲来はあつてもどれも弱い者たちで、村の屈強な若者が相手になれば簡単に退いた。

なのに、なぜ。

今、村を制圧する魔族はかなりの数だ。まるで、軍隊の様。

この村は国軍の統治下に入っていないから支部も駐屯所もない。

近くの街まで行けば国軍の支部があるが、それでも山を越えるか、相当な距離を歩かなくてはいけない。

まさか、軍に援軍を期待できる状態ではないのだ。

『嘘…だろ…』

しばらく俺は呆然としていたのか、それともそれは一瞬だったのか。目の前の惨劇を照らすのは、青空と夕焼けが混ざった奇妙な紫色の光。

『ジルお兄ちゃん…？』

名前を呼ばれてはつとした。気付いたら傍らにサラがいた。

俺を追いかけて一緒に走ってきたのだろうか。近くにラキアもアリアもシユウも見当たらない。

サラの大きな金色の瞳は涙を溜めて揺れていた。

(そつだよ、俺はこいつらを守らなくちゃいけないんだ)

俺はそう思つて、力が抜けてぐったりとしていた身体をぴんと張り、右腕に持っていた剣を握り直す。

護身用に、いつも持っている普通の剣だ。

『サラ、大丈夫だ。悪い奴は兄ちゃんが追い払って、すぐにいつも通りになるからな』

『誰が追い払うって？』

『！』

サラの方を向いていたから、村の中に背を向けていた。

溢れかえる血の匂いと騒音や悲鳴で近付いてきた魔族に気付けなかった。

『なめるなよ、小僧！』

そいつの鋭く伸びた長い爪が振り下ろされたとき、俺は剣を鞘から抜くわけでもなく、構えるわけでもなく、ただサラを抱きしめた。

『…ぐあっ！』

赤黒い血が飛び散る、痛みはない。俺は刺されも切られもしなかったし、サラも無事だった。

『大丈夫か、ジル！』

崩れ落ちた魔族の向こう側にいたのは金髪金眼の男。

柄に装飾が施された大剣を楽々と片手で振りかざす、親父だ。

『父さん！無事だったんだな、母さんは…』

『母さんはもう避難したはずだ。ジルよ、妹たち…それにラキアちゃんはどうした？』

親父は俺たちを守るように背を向けて、そう尋ねた。

腕にも顔にも、そこらじゅうに傷があつて、血を流している。

『ああ、サラならここにいます。アリアとラキアはシュウが付いてるはずだ』

『そうか…ならば、これからはお前が皆を守ってやれ』

『…父さん？何を…』

『ジル、母さんを、妹と弟を頼んだぞ』

『待てよ、父さん…！』

親父は剣の柄を握り直し、一瞬だけ俺たちを見て何か言うように口

を動かした。

そしてそのまま、争いの中心へ飛び込んで行った。

俺は親父を追おうとしたが、服の裾を掴まれ、動けなかった。

裾を掴んだ張本人のサラは駄目、とでも言うように首をぶんぶんと横に振り、涙を流していた。

俺は、何が起きていたのか、どうすればいいのか、わからなかった。

親父の口は”生きる”と動いていたように見えた。

見えるもの全てが赤く染まっていた。

それは、数時間前までいつも通り動いていた見知った顔から流れるものなのか。

ただの、夢か。

甲高い声が近付いてくるのにも気付かなかった。

俺が、もう少しだけしっかりしていれば。

俺が、もう少しだけ強かったら。

俺が、もう少しだけ…大人だったら。

甲高い声、耳障りな笑い声。視界を埋め尽くすのは、見慣れた赤み掛かった黒く長い髪。

見えるもの全てが赤く染まっていた、はずだった。

もっと、緋くなった。

『ジル…、サラ…無事ね』

俺達ふたりを抱きしめるように魔族から庇ったのは、避難したはずの母だった。

母から嘖き出す緋が、視界を染める。黒から、緋へ。

俺の髪も、服も、顔も、記憶すらも、緋く。

母は微笑み、眼を閉じ、崩れた。

緋く染まった花冠が、傍らに落ちた。

『うわあああああ』

『!!!』

それからのはあまり覚えていない。

気付いたら村の半分近くが黒く灰になっていた。

生き残ったのも僅か、村人も…魔族も。

どうやら魔族は撤退し、騒ぎは治まり、村は静まり返っていた。

血と、焼け焦げた匂いが充満していて、この世の終わりかとも思った。

いつの間にか村に戻ってきていたラキアたちの元にサラを預け、俺は村の中心にある広場に歩いた。

正確にいえば、広場の跡、だ。

その広場の更に中心には鉄でできた祠があり、長年このサリヤスを支えてきたものだ。鉄でできていたので燃えてはいない。

祠の傍らに、体格のいい男が倒れていた。周囲同様に焼け焦げている、顔は判別できない。

ただ、右腕に挿んでいるその大剣には見覚えがあった。黒い柄に玉虫色に鈍く光る蛇の装飾。

『…親父…?』

俺は呆然と立っていた。

母の遺体は血だらけであったが綺麗に眼を閉じたままでさっきいた場所に崩れていた。

『…人殺しっ!!』

誰かが言った。

周囲を見渡すと、生き残った村人たちが俺を見ている。

それは恐怖の目であり、憎悪でもあり…狂気にも思えた。

『人殺し、お前が殺したんだ!』

数時間前まで一緒に剣術の鍛錬をしていた友人が、俺を睨んでそう告げる。

『何なんだい、あれは…? ジル、あんたの身体からは炎が出るって
いうのかい…?』

炎?

知らない、俺はそんなの知らない。

『村は、めちやくちやだ。お前があんな炎さえ出したりしなければ
助かった者たちだっただっていったって…』

『この、化け物っ!』

『人殺しっ!』

俺が…殺した?

この身体から、炎を出して?

村を、皆を、魔族を…親父を、焼き尽くした?

身体が熱かった。

確かに自分の身体なのに、どこか感覚が違うような。

思わず両手を見つめると何か生き物のうごめくような感覚すらした。

『腕を天に掲げて、念じなさい』

どこかから声がした。

『は?』

『いいから。そうね…”起きろ”とでも』

その謎の声に導かれるまま、右腕を天に掲げた。

(…起きろ)

瞬間、腕に衝撃が走ったかと思えば、燃えるように緋い蛇の姿をした何か
が右腕から飛び出た。

燃えている、緋い。炎の蛇。

『ひっ』

『化け物!』

周囲の村人たちがまた声をあげる。

その蛇は天高く昇ったかと思えば、急降下してきて俺の右腕に再び納まった。熱いかと思っただら何も感じない。まるで身体の一部かのように俺の腕に消えた。

『それが、貴方の力…』

謎の声のする方を見たが、そこにはもう誰もいなかった。

（俺の…力？）

信じられない。なぜ、炎が出た？

そんな人間、見たこともない。聞いたことすらない。

俺は再び呆然と両手を見つめていたら、石が頭に投げ付けられた。こめかみから血が流れる。顔中すすだらけだったから、血はすすを巻き込み赤黒くなって地面に落ちた。

『…出ていけ！化け物！！』

数時間前までは仲間だった村人たちが、皆敵に見えた。

俺は親父の遺体から剣と鞘を取り、こびりついた血とすすを払い、鞘に納めた。

『ジル…』

ラキアが村人たちから離れて寄ってきた。後ろにはサラ、アリア、シュウもいる。

『ジルの、せいじゃ…ないよ』

ラキアは瞳に涙を溜め、ゆっくりとそう告げた。

その眼には恐怖も、憎悪も、狂気も見えない。

『どこ…行くの？お兄ちゃん』

『どこか、遠く。ここにはいられない』

『そんな…！兄ちゃん！』

『ジル！』

アリアとシュウの泣き叫ぶ声が聞こえた。俺は親父の剣だけを持って、村を去った。

親父との約束を守れないまま。

泣き叫ぶ声と、罵倒する声が、いつまでも耳にこびり付いていた。

夢に見る、緋い記憶。

忘れない、忘れない。

憎むならばどこまでも憎んでくれ。

もう、許してくれとは言わないから。

1 - 3 伏して止まれ 緋く沈め

「…ル、…ジル！」

ジルは自分の名を呼ぶ懐かしい声で意識を戻した。

「あ…れ？」

「意識、とんでたよ？」

目の前には銀色の十字架をさげ、白い修道着を着たシスター。

肩までの茶色い髪だけは、何年経っても変わらない。

ラキア。

「…え？ラキア、俺さっき…お前に…？あれ？」

「出来る限りは治したよ。さすがに完全には治せなかったけど」

困惑するジルに声をかけたのは樹に寄りかかって座るラン。グレイの聖服を脱ぎ、ノースリーブのシャツから伸びる青白い腕にはさつきよりも傷が目立つ。

腕だけではない、顔にも多少の傷がある。

（手加減したとはいえ、俺の炎の蛇が直撃したラキアはそんな軽傷ですまないはず…）

ラキアにはほんの少し火傷の跡が見える。ただし、蛇が噛みついたであろう左肩部分の修道着は黒く焦げている。

ジルは記憶がおかしくなったのかと首をかしげた。

「よくわからない、って顔してる」

ランがニヤリと笑ってそう言った。彼女は先ほどまでの眠そうな顔ではなく、今は少し疲れたような顔をしている。

「確かにあなたの炎でラキアは左肩に重傷を負ったよ。さすが、炎の能力者なだけある」

「じゃあなんでその火傷が消えているんだ？」

「そこからは私の能力。患部の細胞を急速に活性化させて治癒能力を高めたんだ、力を借りるための代償として火傷の一部を傷として

私に移し替える必要があつたけどね」

「…は？」

「私も”訳あり”だつて言つたでしょ？」

ランはそう言うのと立ち上がり、グレイの聖服を再び羽織つた。

「ラン？どこに行くの？」

「大聖堂に戻るんだよ。ラキアの言つてた客人つて、そいつでしょ？」

「…ばれてた？」

「まさか、能力者とはね」

ランはため息をつき、棒剣を担いで歩きだした。

すかさず立ち上がったラキアは、ジルを手招きする。

「突然呼びだしてごめんね。まさかこんなことになってると思わなくて…」

「…」

「顔色、さつきから悪いよ？どうしたの？」

「意識とんでる間、思い出してたんだ…6年前の…」

「…そう」

俯いたラキアから、一筋の涙がこぼれた。

「そう…だよ、あたしに会つと、思い出しちゃうよね…ごめん、ジル…」

「いや、いいよ。それよりもお前がシスターになつての方が驚いたよ、それに、あんな聖職者もいるんだな」

立ち上がったジルはラキアと共にランの後を歩く。

ラキアは変わらない。6年前から何一つ。それがジルを安堵させた。

「ランのこと？あたしも最初は驚いたわ、聖職者には見えないわよね、あの目付きの悪さ！」

「ラキア！聞こえてるよ」

「何よ、本当のことじゃない！」

その目付きの悪い聖職者は迷わず入り組んだ樹海を進んでいく。

そういえば何時間も迷ってたんだっけ、とジルは遠い昔のように思い出した。
太陽はもう傾いている。あと数十分も経てばこの樹海も夕暮れに染まるだろう。

夕暮れの空には良い思い出がない、ジルのそんな気持ちを余所に太陽は今日の仕事を終えようとしている。

湖から10分ほど歩いたところで、樹々の茂る向こう側に石造りの古い建物が見えてきた。

その時、ランは歩みを止めた。

樹の匂いにまぎれて、かすかに血の匂いがする。

まさか、だ。

「私、先に行ってる」

「え、ちよつと、ラン！」

ランは走り出した。そのスピードは眼を疑うほどで、ますます聖職者には見えない。

「待て待て、この匂い…」

「…え？」

ジルも気付いたようだ。彼は啜っていた煙草の灰を落とし、煙を吐いた。その顔は少し青ざめているように見える。

「こついの、なんて言うんだっか。…デジャヴ？」

それでも彼には冗談を言う余裕があったらしい。

ランはすぐに大聖堂の正面広場に到着した。

やはり、そこには思った通りの光景が広がっていた。

「ラン…さん！」

地面に血を流し倒れている二人の男。彼らは大聖堂の見習い神父だ。しやがんで彼らの顔を覗いているのは、赤黒い肌の…魔族。気付かなかつた、すぐ近くの湖にいたつてのに。

自分以外の能力者に出会つたのは初めてだったからか、全く気配を感じられなかつた。

「おお、やあーつと来たか。待ちくたびれたぜ、エイミアード！相変わらず変な色の髪してんな！」

「あんたは今日も酷い面だね。とっとと消えてくれないか、そろそろくたばつてよ。」

ランは目の前の魔族に向かつて遠心力に乗せて棒剣を叩きつける。その衝撃で棒剣はしなり、魔族は吹っ飛んだ。砂埃があがる。

「そろそろ懲りてよ、いくらやつても無駄…っ！」
砂埃の中に佇む影。いつもなら、もうこの一撃で終わっているのだが。

その魔族は手を首にあて、ゴキゴキと首を鳴らしている。そしてランを見て、不敵に笑う。

「あー、効かねえなあ。あんたのそれはもう効かねえよ。」

そう言つたやいなや、ランに跳びかかりその大きな掌を首にかけ、そのまま彼女を地面に叩きつけた。

「かはっ…」

ランは衝撃で血を吐いた。そういえば、今日は叩きつけられてばかりだ、そうぼんやりと思つた。

「…今日は厄日か…」

そう呟いたランの髪を掴んで顔を覗き込む魔族はニヤリと嘲笑う。

「無様だなーあ、エイミアード。今までのお返しだぜ？」

「貴…様、いつもと…随分違う、な」

魔族の尖つた耳がびくつと動いた。そしてまたニヤニヤと笑う。

「はっ！ある御方から力を頂いたんだよ。これで俺はお前よりスピードも力も上だ！まさかこんなに簡単にくたばるとは思わなかつたけどなーあ」

ランは魔族を睨みつけ、棒剣で振り払おうとしたが、それも阻まれた。

視界の隅に見える見習い神父の2人が心配そうに見ている。

「お前の棒剣は効かねえつつつたる？そろそろ”力”を使ったらどうだ？」

「力は…使わ…ない」

「ああ！？これでもまだ言うのかよ！」

魔族はランの髪を掴んだまま、彼女の身体を蹴り上げ、踏みつける。その度、ランは血を吐く。

見習い神父の二人は、ランのまさかの光景に息を止めるほど驚いているが、自分たちも負傷しているため助けることはおろか動くことすらままならない。

ちょうどその時、大聖堂の正面広場にラキアとジルが到着した。

「…ラン！」

ラキアは驚いて声を上げ、ランの元に駆け寄ろうとしたところをジルに止められた。

「ばか、今行ったらお前の方が危ない」

「でも…っ」

「それにあいつ、俺みたいなの”力”があるって言ってただろ」

その言葉を聞いた途端、ラキアはジルに掴まれている手を振り払って、そのままジルの頬をパチン、と叩いた。

「ランは、力を封印しているのよ！さっきジルと闘ってたときだって使わなかったでしょう！？あの子は治癒の力しか使わないのよ…」

「…」

「あ…、ジル…ごめん、あたし…」

ジルはラキアを見下ろす。この6年でジルは随分と背が伸びたようだ。高い位置にあるジルの顔は、さっきラキアが叩いたせいで頬が赤い。

彼はラキアの髪をクシャッと撫でると、煙草に火を点けながらラン

に近付いて行った。

「よお、おねーさん。さっきの威勢はどこに行ったんだ？血だらけじゃねえか」

「…たまたまだよ、あんたこそ、見物？」

ジルはランのその受け答えに対してけらけらと笑う。

そして背中の大剣を鞘から抜く。煙草は啜えたままだ。

「さて、魔族さん。俺が相手だ」

「はっ！てめえみたいな人間に何ができるって言うんだ」

「俺は強えぞ」

ジルはにやりと笑って魔族に向かって切りかかった。棒剣とは違う、鈍く光る刀身は魔族の皮膚を切り裂いた、と誰もが思った。

(硬いっ…)

すぐさま体勢を整えたジルは今度は標的に向かって剣を突き刺した。が、刀身はその衝撃に耐えられず、折れてしまった。

「やべっ…」

「弱いな、お前も！」

先ほどと同じだ。ジルもまた、ランと同じように地面に叩きつけられた。

優位に立った所為か、ニヤリと笑う魔族が視界に広がる。不快だ、そうジルは思った。

「どっつてことねえなあ。剣が折れちまったらお終いじゃねえか」

「ジル！」

ラキアの声がする。

啜えたままの煙草はいつの間にか火が消えていた。

「あんまり、使いたくなかったんだけどな」

右腕を天に掲げる。

6年前の、あの日の様に。

目の前でニヤニヤと嘲笑うこの魔族と、故郷を襲った奴らが重なる。

「しょうがねえよな、もう」

「何を、ぼそぼそ言ってるやがる…！」

鋭い爪が喉元に突き刺さりそうになった時、魔族の身体を上空から急降下してきた炎の蛇が貫いた。

「てめえ…、能力者かっ…」

「じゃあな」

その身体はそのまま炎上し、蛇はジルの右腕に戻った。

そこには、黒い灰だけが残った。

ジルは座りこみ、啜えてた煙草に再び火を点けた。

空はもう、夕暮れを通り越し、暗くなりかけていた。

1 - 4 旅立ち 運命の歯車で踊れ

薄暗い部屋でランは目を覚ました。

ベッドの横のサイドテーブルの上にあるランプの明かりを点ける。

そこはランの自室だった。

起き上ろうとしたら体中がズキズキと痛んだ。

「痛っ……」

そうだった、魔族に……。

簡単に退けられると思った相手は何らかの力を得ていたようで、地面に叩きつけられ、髪を掴まれ、蹴られ、踏まれた。

身体も痛いし、頭がくらくらしている。

ランが奴の襲来に気付けなかったせいで見習い神父が2人負傷していた。

そして、自分もまたこの有り様だ。

あのラキアの幼馴染という男がもしもいなかったら、大聖堂は壊滅していたかもしれない。

（私が…能力を封印しているから……）

ランはしばらく天井を見つめながらぼーっと考え事をしていたが、すぐに眠りの中へ落ちて行った。

時刻は、午前3時だった。

再びランが目覚めた時にはもう空は紅く染まり、太陽は沈んでいく最中だった。

ようやく起き上った彼女は、夢見が悪いせいで酷く汗をかいていた。そんな日は、決まって左腕が軋むように痛む。

いまだに打撲で痛む身体を引きずり、汗を流そうと備え付けのシャワールームに入る。

知らないうちに手当てがされていたようで、顔には絆創膏、腕や足

には包帯が巻いてあったが、どれももう血は止まっていたし酷いものはないので全て取ってしまった。

白いロングワンピースを着せられていたが、左腕の手袋はそのままだった。

それを外し、その下にあるものが視界に入った瞬間に、昨日の魔族の襲来での己の無力さを思い出した。

まるで発作の様にフラッシュバックする。昨日だけではない、今までの記憶。

ランは慌ててシャワールームを出て、サイドテーブルに置いてある小さな袋の中から錠剤を取り出す。

それを口に含み、水で流しこむ。目を瞑り、深呼吸を繰り返す。2回、3回…。

ようやく落ち着いたところで再びシャワールームに入り、蛇口を捻って熱いお湯を出した。

(このままじゃ駄目なことくらい…一番わかってる)
軋むような痛みを左腕を、右腕で強く掴んだ。

ランの髪が乾いた頃、もう外は暗くなっていて、ランは自分がどれだけ長い間寝ていたかを考えないことにした。

どうせまたシスター・ジェーンに仕事をしろ、なんてお小言を言われるに違いない。

今日はもう出掛けるつもりもないので、少し長めの丈の白いシャツに、ショートパンツだけを履いてランは部屋を出た。

棒剣は部屋に置いて、その代わり大きめの肩掛けを羽織って。ラキアと、その客人のことが気になったのだ。

「よう、お目覚めか？」
部屋の前に立っていたのはその客人、ジルだった。

彼は相変わらず黒いロングコートを着ていたが、昨日と違って前は留めていない。

首元に、何か黒い模様が見えた気もしたが、気のせいかもしれない。

「何、ずっとそこにいたの？」

「いや、昼くらいからだ。暇だからな」

そう言っただけでジルの髪が少し揺れる。少し長い襟足は、開いてる窓から入ってくる風に吹かれている。

ランが少し笑った時、廊下の向こうからコツコツと踵を鳴らす靴音が聞こえてきた。

少し大柄な体、初老のシスター・ジェーンだ。やっぱり来たか、とランは一瞬思う。

「ラン、教母さまがお呼びですよ。それと…ジルさん、貴方もです」「俺も？」

「ええ、教母さまの執務室で待っているとのことですよ。いいですね、ラン？」

「…めんどくさいなあ」

ランのその一言にジェーンはキツと眉毛を上げる。シスターらしくない、鬼の形相だ。

「ラン、仮にもお客様の前ですよ！貴女はこの大聖堂の聖母なのですから…」

「あーあー、わかったよ。行きます行きます」

ランは耳に手をあて、ジルの顎でしゃくり、足早に歩き出した。身体はいまだに痛い。

「なあ、聖母って…」

「え、言っただけじゃなかったっけ？私、この大聖堂聖母。立派な聖職者」

「はあ!？」

盛大に驚いてくれたジルの後、ある意味シスターよりも衝撃が強い、と言っていた。

” 教母さま” の執務室は、大聖堂の2階にある、突きあたりの大きな部屋だ。

ランはノックもせずドアを開け、ずかずかと入って行く。

「マザー！一体何…って」

「あら、ラン。お目覚めね、もう身体は大丈夫なの？」

そこにいたのはラキア1人だった。彼女は左肩の焦げていない、替えの修道着を身にまとい、壁際に立っていた。

ランに続いてジルも怪訝な顔をして部屋に入る。

その部屋の奥には大きな仕事机が置いてあり、その向こうには大きな窓がある。

中心には二人掛けのソファが向かい合っていて、その間には同じ色のテーブルがあり、応接間のような雰囲気だ。

ただ、両側の壁には天井に届くほどの本棚が並んでおり、古い本から新しい本に隙間なく埋め尽くされている。

ラキアはテーブルに近寄り、何処からか持ってきたティーポットでカップに茶色の液体を注ぐ。

どうやら紅茶の様だ。芳しい香りが部屋に満ちる。

「ああ、良い香りですね。ありがとう、ラキア」

再び扉が開き、声が聞こえた。ラキアは扉の方に身体を向けて綺麗にお辞儀をした。

「マザー、いったい何の用？」

「そう急がないで、お掛けなさいラン。…貴方も、こちらに」

その人はよく通る澄んだ声で3人をソファに促した。

黒い神父服のような聖服を着ていて、短く黒い髪、小柄な女性だ。

見た目では20代後半くらいだろう。

ラキアとジルは並んで座り、その女性はランの隣に腰を下ろした。

「酷いやられ様だったみたいですね、ラン。少しは反省しましたか」

「…そんなこと言うために呼んだの？」

その女性はにこにこ微笑みながら厳しい言葉を並べ、その言葉を

ランはソファの背もたれに身体を預けて聞き、答える。目線は天井を向いている。

そして黒髪の彼女はジルの方を向いて微笑む。

「初めまして。この大聖堂の教母、ユヅキ・エイミアードと申します。貴方が炎の能力者ですね、お名前を伺ってもよろしいですか？」

「ジル…、ジル・リンプスです。あの…”能力者”って一体…？」

「あら、ラキア。お話してなかったの？」

「すみません。慌ただしくて…」

「そうね、しょうがないわ。ジルさん…貴方には知らなくてはいけないことがたくさんあるんです」

ユヅキは手元の紅茶を一口飲んでまた話を続ける。相変わらずランは天井を見上げている。

「ジルさん、500年前の伝説を知ってますか？」

「さわり程度なら…。月の話ですよね」

「そう、この世には大きな白い月と、それに寄り添う小さな赤い月が存在しています。それは500年前にも空に浮かんでいたのです。

あの赤い月には生物と同じように意識があり、破壊や争いを繰り返す人類に絶望し、世界を壊そうとした…自らを神にし、世界を創り直そうとしました。

しかしそれは実現されなかった。どこからか現れた7人の戦士によつて赤い月の化身は封印され、空には白い月だけが残った…。

そして世界は崩れることもなく、今日まで続いている…といったものですね」

ユヅキはそこまで一気に話した。ゆっくりと、言葉を噛みしめるように。

その時、ランは天井を見上げていた顔を前に向き直し、ユヅキの代わりの様に言葉を発した。

「その7人の戦士たちはね、人間が持つはずのない人外の力を持っていたんだ。光、闇、炎、水、風、地…そして無。自然界の力をそ

れぞれがひとつずつ。…わかった？」

「まさか、それって…！」

「そのまさかだよ。あんたのその炎の力がそれなんだ」

「ちなみにこの子は光の力を司っています、もう拝見しましたでしょう？」

ジルは驚き、取り乱している。突然伝説の中の戦士と同じ力が自分にあると言われたら驚くに決まっている。

「その力は赤い月と非常に密接な関係にあります。赤い月が活動を広げる時、必ずどこかで能力者が覚醒してきました。500年前は7つの力の能力者が全員。」

150年前に赤い月が再び現れた時は1人だけ能力者が覚醒したと聞きます。その時月による被害はほとんどありませんでした。

どうやら覚醒する能力者が多ければ多いほど、赤い月も力を増すようなんです。

そして、最近判明したことでは…魔族を率いているのはあの赤い月のようなんですね。」

”魔族”という言葉にジルの眼がびくつと反応する。その眼には一瞬憎悪のようなものがチラついたのをランは見逃さなかった。

「昨日の魔族は、よく大聖堂を襲いに来る者だったのですが…どうしてか昨日は格段に強さが増していました。おそらく月の力が強まっているのでしょうかね。」

このままでは世界は今度こそ滅びてしまうかもしれません。いくら各国の軍隊が対抗しても、あの月を封印できるのは能力者だけでしょう」

「で、俺に何をしろと言うんです？」

「そうですね…能力者を、探していただきたいのです。そのつもりで貴方をこちらに呼びました、ラキアを通じてね」

ジルがラキアを横目で見ると、彼女は少しばつの悪そうな顔をしている。

少しの間、沈黙が流れた。

ティーカップの中の紅茶はもうすっかり冷めている。

ランが再び顔を天井の方に向けた時、ジルは口を開いた。

「…いいですよ」

「ジル！ほんと？」

「ただし、世界のためとかそんなんじゃないです、俺は魔族が許せないだけっすから…」

「それでも構いません。それから、この子も連れて行っていただけませんか？」

「…は！？マザー、何を…」

につこりと微笑んでランに片手を向けたユヅキにランは仰天する。思わずソファから滑り落ちそうになるほどである。

「私がいなくなったら大聖堂は…っ」

「あの有り様で何を言っているんです。先ほど国軍の方に連絡を入れました、明日にでも臨時の方を数人寄越してくれるそうですよ。貴女もそろそろ覚悟を決めないといけない時が来たんです」

「…わかったよ」

右腕で左腕を強く握りながらランはそう微かに答えた。

それを見てユヅキはにつこりとする。そして再びジルの方を見る。

「貴方の実力は見てましたよ。随分と炎を操れるようになったんですね…6年前とは大違いです」

「…え？」

「サリヤスで一度貴方を拝見しています。私はただ使い方を導いただけですけどね」

「もしかして…あの時の…」

「さて、どうでしょうね」

ユヅキはそう呟いて冷めた紅茶を飲み干した。

窓の外には2つの月がゆらゆらと浮かんで、夜空を頼りなく照らしていた。

ユヅキの部屋を後にしたジルは、用意された客間に向かう途中でラキアに呼びとめられた。

「ジル、あの…ごめんね。いろいろと…」

ジルは頭をガシガシと掻きながら、俯く幼馴染を見下ろしていた。何て言ったらいいのかわからないのだ。洒落た言葉を使えば、こうなることは運命だった、だろうから。

能力者の宿命なのだ、とユヅキが暗い目をして呟いていた。

「それでね、ジルのあの剣、昨日折れちゃったでしょ？お父さんの剣…」

「ああ、そういえば…」

「あれの対の剣が、確かサリヤスのあたしの家にあるはずなの。お爺ちゃんに聞けばわかると思う。あれを使えるのはたぶんジルだけだから…」

「いいのか？」

「うん。いずれ渡そうと思ってたから」

「そっか、ありがとな」

ジルはラキアを見て笑った。ジルは随分と大人っぽくなったが、その笑顔は変わらず無邪気なままだ、そうラキアは思った。いつまでも変わらないでいてほしいと、ラキアは願った。

翌日、空は相変わらず晴天で、世界が異変に脅かされているなんて忘れそうなほどだった。

「そろそろ、行こうか」

正面広場のベンチに腰掛けて煙草を吸っていたジルに、大聖堂中央の礼拝堂の重い扉を開けて中から出てきたランが声をかけた。

彼女は相変わらずの白いドレスシャツにリボンタイを結び、ショートパンツからはすりと青白い細い脚が伸びている。

グレイの聖服を羽織っているが、前は留めていないし、今はフードもかぶっていなくて長い銀髪が風に揺れている。

「もう、いいのか？」

「はは。だってまた戻ってこれるから。最後の別れとかじゃないんだから」

その言葉にジルは少し笑い、煙草の煙を吐いた。

立ち上がり、大聖堂を見上げる。折れた剣はラキアに預けた。

ロングコートの前は全て留めてある。

「そろそろ軍人が来るらしいからね。鉢合わせても面倒」

「…軍人？来るのか、ここに？」

「うん。私がいなくなるからね、用心棒がいなくなるんだよ。だからマザー…ユツキが軍に要請したの」

「…それは俺も会いたくねえな」

ジルは軍という単語に苦笑いをする。

ランはわけがわからなくて少し首をかしげるが、あまり興味がないようですぐに歩き出そうとした。

「ラン」

再び開いた扉から出てきたのはラキアとユツキ。

「くれぐれも、気を付けて。貴女は…貴女ですから」

「大丈夫、わかってるよ」

ランは左腕をまた握りしめながらユツキにそう答える。

ユツキはそれを確認してからジルに向き合う。

「ランを頼みますね、ジルさん。聖母の職務にあってもこの子はまだまだ子供です…」

「マザー！」

「ふふふ、本当のことでしょう」

その光景にジルは口を挟む隙が見つからず、ただお辞儀を返しただ

けだった。

「ラン、あの…」

「うん。兄さんでしょ。探しとくよ、大丈夫連れて帰るよ」
そう言つて微笑んだランにラキアはありがとう、と呟いた。

「ジルも、元気で帰ってきてね」

そうして、2人の能力者は歩き出した。運命を、背負つて。

「なあ」

「何？」

「なんで、マザーなんだ？」

とりあえずリオンの街に出ようと、樹海を歩く途中でジルはランに
そう尋ねた。

あの女性は母と呼ぶにはまだまだ若すぎる、そう思ったからだ。

「ユヅキは私の育ての親だから」

「は？あの人どう見たつて20代だろ」

「訳あつて不老と延命処置が施されてる。実はあの人もう520歳
越えてる」

ジルはその言葉に声が出なかった。

そして振り払うようにして違う話題を出した。

「そつえばお前いくつ？」

「19歳」

ランは即答する。

「…ジルは？」

「は？」

突然名前を呼ばれたジルは間抜けな声をあげた。

「だからジルは？いくつ？」

名前を呼ばれただけなのに、柄にもなく驚いてしまっている。

「21だよ、ラン」

今度はランが驚いた。

空には真昼の月が浮かぶ。

白と赤、寄り添いながら漂う姿には恐怖すら忘れるほど。

動き出した歯車は、もう止まらない。

その頃、大聖堂には濃紺の軍服に身を包んだ2人の男女が訪れていた。

女の方は白い髪で前髪が長く片目が隠れている。露出している方の眼は紅く、いかにも陽に弱そうな外見をした美人である。

もうひとりの男はおそらく部下だろう。彼女の一步後ろを歩いている。

「ウィール少佐、貴女ほどの方に来ていただけるなんて思ってもいませんでしたよ」

ユヅキが女の隣を歩きながらそう言う。

「いえ、この大聖堂は国にとってもとても重要な場所ですから。それにランの故郷ですしね。正式な駐在担当が決まるまでは私がいる予定です」

「中央の方は大丈夫なんですか？」

「まあ、大佐がちゃんと仕事さえしてくれれば問題はないでしょうね」

少佐と呼ばれているその女は礼拝堂の中を見回して呟く。

「この様子では、ランはもう旅立ったみたいですね」

「ええ。やはり親心は痛みます。兄妹ふたりともいなくなってしまうましたからね」

そう言つて少し微笑むユヅキに対して少佐はある一枚の紙を取り出し、渡した。

「それと、現在捜索中の賞金首がおりまして…。拠点としているらしいメルシャーナからここ数日姿を消しているらしいです」

「あら、お若い方ですね」

「ええ、ここ数年で盗賊団を結成し頭領を張っていた男の様です。軍が付けた賞金ではないのであまり詳しくは知らないのですが…、なかなか危険な男と聞いていますので一応警戒はしててください」少佐はそう言つてユヅキに一礼し、再び礼拝堂の外へ出て行った。

「あらあら…」

ユヅキは口に手を当て、少し困惑する。

(どう見ても、本人ね)

金の髪に金の瞳、射るような視線をした男が写真に写っている。首筋には肩まで及んだ黒い刺青が。

それは、かの炎を纏った彼にそっくりであった。

2 - 1 懐かしの故郷は今

大聖堂を離れ、リオンからサリヤスに向かうには徒歩しかない。

そう言った彼女、ランは銀髪を聖服に付いたフードで隠しながら歩く。

話は昨日に遡る。

『サリヤスに?』

『ああ、忘れモンをな』

リオンの港町のターミナル付近でジルは自分の故郷へ向かうことを提案した。

『…平気なの?』

怪訝な顔をしてランはジルに尋ねた。

ラキアから少し聞いた話だと、彼は能力の覚醒によって村を半壊させたという。

そしてそれ以来村には近寄っていないはずだ。

『まあ、いつか決めなきゃいけない覚悟だ』

そして現在、晴天の下2人の男女が道に行く。

『なんで列車通さないかなあ、あの村は』

『今も昔も、閉鎖的なんだよ』

サリヤスに向かうと決めた時から、ジルを取り巻く空気は少しピリピリしているように思える。

どうやら落ち着かないようで煙草を吸う頻度が増している気もする。しばらく歩いていたら、後ろから一台の荷馬車が近付いてきた。

ランはその荷馬車の方に向かい、何か交渉をしているようだ。ジルはぼんやりと空を見上げる。

(6年振りか…)

もう奇妙な夕焼けも、緋く染まる世界も、そこにはないはずなのに。

ジルは微かに震える腕を見ないようにした。

太陽が頂点から傾き始めた頃、歩く道は石畳から砂利道へと変わり、段々と整備の行き届いていない一本道へと変わった。

「よかつたよ、途中まで乗せてもらえて。今日も野宿かと思った…」
そうランが呟きながら歩いていると、道の脇の草むらに紛れて小さな花畑が見えた。

それを見てジルはふと立ち止まる。酷く、暗い目をして。

「ジル？」

「あ、ああ。行こう、サリヤスはもうすぐだな」

何が何だか分からない、といった表情のランをよそにジルは足取りを速めた。

山あいの村サリヤスは、軍事国家ネイディアの西部に位置しており、大聖堂を有する港町リオンから南下すると辿り着く。

山と海の両方を有する広大な土地があり、村の集落自体は山沿いにある。

公共の交通機関は開通してなく、蛇を祀る民族としてネイディアでも孤立した村でもある。

この土地は、ジル、そしてラキアの故郷だ。

「村、復興したんだな」

ジルの記憶の中の最後に見たサリヤスの姿は半分以上の家は焼け落ち、大勢の村人が倒れている光景で。

今彼の目の前に広がるのは新しく建てられた家屋、笑い合う人々…
まるである事件が起きる前の姿のようだった。

村の中央に位置する広場には鉄で出来た祠のようなものがある。ランはそこに足を向け、後ろから歩いてくるジルに尋ねた。

「閉鎖的な理由って、これ？」

「ああ、まあな。サリヤスは蛇を祀る民族で…古い風習を守り続けているから。まあ、新しいものへの抵抗があるみたいでな」

「…これは、燃えなかったんだね」

「ははっ、それを鉄で作ったご先祖さまのおかげだな」

ジルは時々見せる自嘲的な笑みを漏らした。

そしてその祠のすぐ下の地面を見る、そこは彼の父親が横たわっていた場所。

もちろんもうそこには何も無い。黒い塊も、紅い血も。

「ジルかい…？」

背後から聞こえた声に振り返ると、そこには腰の曲がった老婆が杖をついて立っている。

その眼は6年間行方不明だったジルを懐かしく思うものでもなく、再会を喜ぶものでもなく、微かな恐怖が浮かんだ…そんな色をしている。

…その老婆だけではなかった。

広場にいた村人たちは老婆の言葉に反応し、ジルを見ている。

どの眼にも、恐怖が見え隠れしていた。

「ジルだって…？」

「そうだ、あの金髪金眼はあの息子じゃ」

「生きていたのか…？」

「恐ろしや…恐ろしや…」

その声たちにつられてか、さっきよりも広場には人が集まってきている気がする。

ランが見上げるとジルは少し困って、片眉を下げてまた自嘲的に笑う。

「あんだ、あんまり歓迎されてないみたいだね」

「しょうがねえよ。あれだけぶつ壊したんだからな」

ジルが行こう、と言って広場から離れようとした時に近付いてくる1人の少年の姿が見えた。

「人殺しっ!」

その少年の発したその言葉は、ジルの動きを止めるには十分すぎる一言だった。

広場に響いた、その声。

「ジル兄ちゃんの…いや、お前のせいであ…父ちゃんを返せよ!母ちゃんを返せよ!」

その声、叫び声はただただ響き渡り、広場の空気は明らかに変わっていた。

「返してくれないなら、おれがお前を殺してやる!誰もお前のことなんて許してなんかないんだ!」

ジルの眼は暗く濁っていた。

落胆や絶望にも似た、何も映さない無気力な色。

「そんなことを言うてはならんぞ」

ランが口を開こうとした時、凜とした声が聞こえた。

「セン!こっちに来なさい!」

駆け寄ってくる少女が続いてその言葉を発した。

叫び続けている少年は名前を呼ばれたらしく、びくつと肩を震わせ、て叫ぶのをやめた。

どうやら姉弟のようで、近付いてきた少女はすみませんでした、と頭を下げて少年を連れていった。

少年はそれでもジルを睨み続けていた。

それと入れ違いに背筋が真っ直ぐと伸び、上品な笑みを浮かべた老人が歩み寄ってくる。

おそらくさっきの凜とした声はこの老人のものであろう。

「ジル、久しぶりじゃな。6年振りか」

「爺さん、俺…」

「立ち話もなんじゃ、わしの家へ行こう。お前に渡すものもある」
その老人の眼には、他の村人の様な恐怖や憎悪の色は見られなかつた。

それから老人はランに視線を合わして、それから再びジルに尋ねた。

「ジルよ、もしやお前はリオンから来たのかい？」

「ん？ああ、そうだけど…」

「そうかそうか、それで…。さて、付いてくるがいい。お嬢さんもおいで」

「ラキアの爺さんだよ」

歩いている途中でジルはランにそう囁いた。

2 - 2 階上の偏屈な隣人

その老人：ラキアの祖父であるアグネス卿の家は村の外れにある大きな屋敷だった。

3階建ての屋敷の上の方からなんだか不気味な音や、奇妙な色の煙が見えた気がしたが、ランもジルも気付かないふりをした。

玄関の扉を開けたら、奥の部屋から10歳前後ほどの少女が顔を出した。

その少女は金色の髪と金色の瞳をしていて、予想外の訪問者に目を丸くしている。

しかしすぐに駆け寄ってきてジルの腕にくっつき、その大きな金の瞳でジルを見つめている。

「おお。サラ、ただいま」

アグネス卿は少女に微笑み、そう言った。

「サラ：？」

ジルに名前を呼ばれたその少女：サラはにこりと微笑み、こくりと頷く。

「：ただいま、サラ」

ジルは強張っていた頬を少し緩めて笑う。サラの髪を撫でながら。そしてそのジルの言葉にサラはおかえり、と口を動かした。

声は、聞こえなかった。

「しばらく見ないうちに立派になったのう、ジル」

居間に通されたランとジルは勧められるがままにソファに座った。

サラはジルにぴったりとくっついて離れようとしない。

どうやらご機嫌の様で、ずっとにこにこことジルの方を見ている。

「センが、すまなかったのう。いまだに心の中での整理が出来ていないようじゃ。あの時のことはお前だけの所為ではないのにな」

ジルは先ほどの広場での出来事を思い出し、唇を噛み締めた。

「お嬢さんは大聖堂の聖母さまじゃろう？ラキアから聞いているよ、綺麗な銀色の髪をしている方だと」

そう言われ、ランはかぶっていたフードを外した。

銀色の長い髪が滑り落ち、キラキラと流れる。

「ラキアの姿もここ2年ほど見ておらんのか。ジルが村を離れた後にラキアも大聖堂へ身を委ねたのじゃよ」

「ラキアは元気でやっています。心配ありません」

ランは微笑んでアグネス卿に告げる。

口髭を伸ばしたその顔は穏やかに微笑む。

「なあ爺さん、なんでラキアはシスターになったんだ？」

「うむ…」

ジルの問いにアグネス卿が言いにくそうに言葉を濁した時、上の階からガシャン！と音がした。

「爺さん…？何か飼ってるのか…？」

ガシャン、という音の後にも異様な音が続いているのでジルは少しうろたえている。

「ほっほっ、賑やかじゃろう。ちょいと面白い奴が上に居候しているの」

その途端、石造りの天井に穴が開いた。

ランもジルも啞然として見ていたが、アグネス卿はただただ笑うだけだった。

「あー、あー、すみません！またやつちやいましたお爺さん！」

居間にある階段を降りてきたのは、白衣を着て黒縁の眼鏡をかけた深紅の髪に同じ色の瞳をした青年だった。

よく見ると白衣は汚れていて、中に着ているシャツはよれよれだ。

細身のパンツもところどころに汚れが目立ち、足元はサンダルである。

肩まである髪は伸びっぱなしのようではさばさであるし、目元には隈が目立つ。それでいて背はひよろりと高く、無駄な肉の一切付い

ていない瘦せた身体つきをしている。

病的だ、そんな印象がある。

「あれ？」

青年はランとジルを見て一瞬驚いた後、また声を発した。今度は2階に向けて。

「エリイ、エリイー。降りてきてくださいー」

青年に名前を呼ばれ、降りてきたのは短く黒い髪をした幼い少女だった。

少女は前下がりの短髪で、大きな瞳は黒目がちで可愛らしい顔つきをしているが、右側の額から頬を通って頬にかけてまでの切り傷の跡が見える。

青年とは対照的に小綺麗な格好をしており、フリルのたくさん付いたクラシックなドレスワンピースを着ている。

「お爺さんすみません、すぐに直しますねー」

青年はにこやかに笑ってそう言った。

「カナン、土」

「あ、そうだそうだ。ありがとうございます、エリイ」

エリイと呼ばれたその少女はいつの間にか土の入ったバケツを持っていて、それを青年に手渡す。

青年はバケツを受け取って自分の傍らに置き、右手の人差指を立て、くいつと天井に向けた。

途端、床に散らばった石造りの天井の破片とバケツの土が宙に浮き、みるみるうちに穴が塞がった。

元々の石壁と土の混ざった天井が完成した。

「はい、元通り」

「うむ、いつ見てもおもしろいのう」

青年は両手をパンパンと合わせ、一仕事終わった、といった素振りを見せた。

アグネス卿も満足げに笑みを浮かべている。

ランとジルははまだ啞然としていて、状況がうまく掴めないでいた。「今のは…?」

思わずジルは声を漏らした。

彼が言わなくても、おそらくランが呟いていたことだろう。

「驚くことないはずですよ」

青年はまるで呼吸するかのように、流暢に言葉を続けた。

「僕も、能力者なんですから」

直に能力者同士が互いに惹かれ合うように出逢うでしょう。

大聖堂を出る前夜、ユヅキの部屋でそう言われたことをランは思い出した。

その赤髪の青年はランとジルを交互に見てはつきりとした声色で言う。

「…あなたは、光の能力者ですね。現在はリオン大聖堂の聖母さまと聞いています。そして…あなたは炎の能力者、この村のご出身ですね」

ランの目は見開き、ジルは怪訝な顔をした。

初めて会ったこの青年は、なぜ自分たちのことを知っているのだろうか。

青年は両手を上げて、困ったように笑った。笑うと余計に疲れて見える。

「そんな疑うような眼で見ないください。あなた方のことも、500年前の伝説のことも…僕自身のこの能力のことだって、とある

人に聞いたんですよ」

「とある人？」

「旅の神父さまですよ。ああ、ちょうどあなたの瞳と同じ色の…濃紺の髪と瞳をしている方でしたね。それに、同じ黒い口ザリオを提げていました」

青年はランの方を向いてそう告げた。

ランの中で鮮明に蘇る、彼の人の姿。

「まさか…アレン…」

微かに呟くその声は、ジルにはうまく聞き取れなかった。

「その人は、どこにいる！？どこで出会った！？…いつ！？」

「ラン！？どうした、落ち着け！」

糸が切れたように取り乱したランは、ジルが抑えつけなければ青年に掴みかかっていたのでは、というほどの剣幕だった。

ランは肩で息をしている。

出会ってからまだ間もないが、ランが取り乱したところは初めて見た。

魔族によって散々な目に遭わされたときだって彼女は悪態をつく余裕を見せていた。

「落ち着いてください。その神父さまに会ったのはもう半年ほど前のことです。その時僕はメルシャーナの中心街の路地裏で薬屋を営んで日銭を稼いでいました…といってもあの頃は街から街へと流れていたのです、出会ったのも本当に偶然です」

メルシャーナとは、この国の首都の名である。

ランはジルに抱えられ、俯き、深呼吸を繰り返している。

彼女の首に提がる黒い十字架が呼吸と共に深く揺れる。

その姿を一瞥し、青年は話し続ける。

「その神父さまは旅をしている、とだけ言っていました。名前は聞いていません。あなたのことと、僕らの能力について教えてもらいたんです」

「その神父…私の兄だと、思う。2年前、何も言わずに大聖堂から

出て行っただけだ…そんなことをしてただね」

ランは落ち着いた様子でジルの腕を解いた。

「ごめん、と呟いたランに対してジルは何も言わず、青年の方を見る。ソファに座っていたサラがランに近付いてその手を握った。ランは少し困ったように笑う。」

「お兄さんも能力者ですか？」

「いや、兄さんは違うよ。でもまあ、一人で旅ができるくらいの体術は身につけてるはず」

「なあ、なんで俺が能力者だつて知ってたんだ？」

「あなたのことは友人の情報屋に聞きましてね。…知っているでしょう？レンテイルという男です」

「…ああ、あの人か。それなら納得だ」

ジルと青年が勝手に納得するのをランはぼんやりと見ていた。

「さて、あなた方に話したいことがあるのですがね…少し暗い話になりそうなので…」

青年はちらりとソファに座るアグネス卿を見る。

その老爺は口髭を撫でながら上品に笑う。

「ほっほっ、ここまで巻き込んでおいて何を言っておる。わしは黙って聞いておるよ。それにジルに話すことだつてある」

「そうですか、じゃあ…エリィ！」

先ほどの土の入ったバケツを片付けていた少女に青年は声をかける。少女は駆け寄ってきて、首をかしげる。

「エリィ、サラと一緒に庭で遊んできてくれませんか？」

「あたしはのけ者？」

「違いますよ、重要な役目です」

「…わかった。サラー！」

少し頬を膨らませた少女はその任務を遂行しようと、サラを連れて庭に出て行った。

今の大きな窓からは庭がよく見える。

青年は庭が見える位置のソファに腰を下ろし、ランは窓際の壁にもたれかかる。
ジルは相変わらずソファにいる。
アグネス卿が4人分のお茶を入れる音が居間に響いている。

「さてと、自己紹介がまだでしたね。僕はカナン・シルフォード、地の能力者です。普段はがらくた集めとかいろいろんな研究をしたりしています」

青年、カナンは伸びっぱなしの真紅の髪を少し揺らしてそう言った。続けてランとジルも名乗った。

そしてランは窓の外をちらりと見て聞く。

「あの子は妹か何か？」

「ん？サラは俺の妹だぞ？」

「違うよ、あっちの黒い髪の子。それにジルじゃない」

「ああ、あの子も能力者ですよ」

カナンはさらりと言ったのけた。

窓の外、庭で遊ぶ2人の少女。金の髪のサラは黒髪の少女に付いて回り、2人とも無邪気に笑っている。

まだ幼く、無垢な少女が背負っているその運命にランもジルも少し表情を歪めた。

「あの子はエルリア・セルジオ。僕はエリイと呼んでいますが、彼女が持つのは次元を操る力：無の能力です」

カナンは庭にいるエリイを見つめながら遠い目でそう呟く。

「まさか、こんなに近くに能力者が2人もいたなんて…」

「これで4人か」

そう呟くランとジルを横目に、カナンから驚きの一言が零れた。
「僕らはまだ、此処を離れません」

「あなた方にはあの子…エリイはいくつくらいに見えますか？」
カナンは窓の方に寄って行って、庭ではしゃぐ2人の少女を見つめた。

ランは近くに来たカナンの顔を見る。黒縁の眼鏡の奥、真紅の瞳が少し揺れたのを見た。

「いくつって…サラと同じくらいか？」

サラは確か今12歳のはずだ。黒髪のエリイは見る限りではサラよりも少し幼く見える、そうジルは思って答える。

「あの子は、もう15歳になるんですよ」

「普通の子より小柄なだけだろう？」

「いやジル、それにしてもあの子は…」

ジルのごく一般的な意見をランはやっぱりと否定した。

「ええ。あの子は世間的には”普通”ではありません…能力者という事実を差し引いてもです。そのことをちゃんと知っておいていただきたいのです」

アグネス卿の淹れたお茶は湯気とともに芳しい香りをたてている。

それを飲んでいるのはお茶を淹れた張本人だけだったが、その香りは居間に充満しており、これから話される事柄をいくらか穏やかにしてくれそうだ。

「エリイの身体の半分近くは、ナノマシンとその他の機械で形成されています」

「…ナノマシン？」

「細胞よりも小さな…機械ですね。それと、神経を結合させた機械の義手と義足を持つのがエリイです」

カナンは相変わらず遠い目で庭を眺めている。

視線の先は、話題の中心の少女。

「どうして、あの子が…？」

「能力の暴走です。あの子は生まれた時にはもう力が覚醒していました。それが祟ったのでしょね、忌み子として親に捨てられたあの子は全てを憎み、世界を呪い…無意識のうちに自分自身をその能力によって無に返そうとしたんですよ」

カナンはただ淡々としていて、落ち着きすぎているその姿は、逆に恐怖すら感じる。

「僕らが気付いて駆け付けた時には…左半身は重傷、左腕と左脚はもう原形を留めていませんでした。医術の長けた街でしたのですぐに治療を施しました。命を繋ぐため、失った細胞の代わりに僕は研究中のナノマシンを…彼女の身体に移植しました」

酷く残酷なことをしました、そうカナンは呟いて困ったように笑いながら眼鏡をくいと上げた。

ジルもランもよくわからない顔をする。2人とも機械や科学は苦手である。

「そのナノマシンってのを身体に入れたらどうなるんだ？」

「エリイの体内のナノマシンは先ほど言った通り失った細胞の代わりに。神経や筋肉、臓器や皮膚になり彼女を形成する一部となっています。結果的にエリイは助かりました。機械の義手義足は彼女の希望で取り付けました、自己修復能力があるとさえも研究中のナノマシンでは失った手足を完全に復元ができませんでしたので…」
次々にわけのわからない言葉を耳にして、ランもジルもほとんど黙って聞いている。

「しかし、元々の身体に存在しないものが入り込んでずっと無事でいられる保証はありません。ここ数年でエリイにはナノマシンの拒否反応が起きるようになってしまいました。そして機械の手足のせいなのか、もしくは能力の比重ででしょうか…あの子は身体の成長が極端に遅くなってしまうんです」

ランは壁にもたれたまま、窓の外で遊ぶエリイを見た。

スカートから覗く足は黒いタイツに包まれていて、素肌は見えない。袖も長袖のため腕は見え、左手は手袋に包まれている。

そしてランは自分の左腕に視線を落とし、その腕にはまっている長く黒い手袋をまじまじと見た。

(まるで、同類だな)

ランは誰も気付かないくらい密かに、自嘲的な笑みを浮かべた。

カナンの声はまるで懺悔のように居間中に響いていた。

時々その真紅の瞳が揺れるのをランは見ていた。

「だから、ここで研究を続けているんですよ。エリイの拒否反応ができるだけ抑えられるように」

「ここじゃないと駄目なのか？」

「僕らはずっと根なし草で、街から街を転々としてたんです。何せこの能力に、研究者と機械の身体の少女。何処へ行つたって奇人変人呼ばわりですよ。」

ですが、此処は…この屋敷のお爺さんやサラ達は僕らを受け入れてくれたんです。

研究所をくれた、寝屋をくれた…ぬくもりをくれた。だから、

僕はそれ相応のものをこちらに返すつもりです」

そう言つてカナンはジルの方を見た。

眼鏡の奥の真紅の瞳は真つ直ぐにジルに向けられている。

「サラの、声です」

「サラの…声？」

ジルはカナンに聞き返した。

確かにさっき、サラは口を動かしてはいたものの、声は一切発さなかった。

それをランも確かに見た。

カナンが口を開こうとしたが、代わりに聞こえたのは年老いてはいるが、凜とした声。

「サラは、あの事件が起きた日から声が出なくなっただんじやよ。目の前であのようなことが起きてはな…しょうがないことだ」

「お兄さんが帰ってくれば、と思っていたのですが。やはり駄目でしたね。地道に治療を続けましょう」

アグネス卿とカナンンのやり取りがいまいちわからない、といった風にジルは首をかしげる。

「どういうことだ？」

「だから、カナン君がサラの声を取り戻そうとしてくれているのじやよ」

「…精神的なものだと思いますから、慎重にやらないといけないので今すぐにはいきませんがね」

そう言つてカナンはジルを安心させるように微笑んだ。

「そっか、あの日からサラは…俺は妹にまで傷を負わせたんだな」
ジルはうなだれて、金の瞳を伏せている。

それを見たカナンは困ったような顔をして、アグネス卿は何かを言おうとしたが言葉にはならなかった。

「でも、笑つてたよ？ジルのこと見て嬉しそうに」

響く、ランの声。

壁にもたれ、窓の外を見ながらぶっきらぼくに呟くその声。

「だから、あの子は大丈夫」

そしてジルの方を見て少し微笑んだ。

その右手は首から提がる黒く大きな十字架を握りしめて、まるで祈りを捧げるかのように。

アグネス卿の淹れてくれたお茶が冷めてきた頃、エリィとサラは遊

び疲れて屋敷の中へ戻ってきた。

ジルはサラの頭を撫でて、くしゃりと笑う妹をそつと抱きしめた。エリイはランの左腕の手袋を「お揃いだね」と言って喜んでいて、少し拍子抜けをしたようにランは驚いていた。

目の前にいるこの幼い少女は、己の宿命をもう受け入れているのか、と。

「爺さん、そういうえばシュウとアリアは？ここにいるのか？」

アグネス卿の片眉がぴくつと微かに動き、先ほどよりも少し強張った声を発した。

「シュウは、そろそろ帰ってくるじやろう。アリアは……」

その言葉を遮って、バン、と大きな音を鳴らして玄関の扉が開く音がした。

ほどなくして、居間の扉が開き、赤みがかった黒髪の少年が勢いよく飛び込んできた。

「爺ちゃんどうしよう！軍人がうちに向かってるよ！！」

その声は、懐かしさと共にジルの響いた。

2 - 3 元国軍外務庁中央司令部中尉

軍人、という単語を聞いた時、ランは少しだけ眼を見開いた。

その赤みがかつた黒髪の少年は、今自分が伝えるべき事柄に必死らしくて、見慣れない訪問者の2人には全く気付いていない様子だ。息を切らし、少し前のめりで居間の扉に寄りかかって途切れ途切れで言葉を紡ぐ。

「爺ちゃん…、やばいよ…あいつら、何、か、変なこと…言ってる、さ！爺、ちゃんが、危険な奴を…かくまって、る、とか何とか、つて…」

顔を上げたその少年の瞳は右が金色、そして左は黒：オッドアイだ。少年の姿とは対照的に、カナンは窓際からソファにゆっくりと移動し、煙草に火を付けている。

カナンの吐き出した煙が天井に届こうとした時、ジルは少し強張った声を出した。

「…シユウか？」

「え…？つて、まさか…兄ちゃん！？」

その声を聞きながら相変わらず窓際にもたれているランは窓の外を見た。

庭の先には見慣れた濃紺の軍服を着た3つの影が見えた。

彼女の視力は良い方である、顔はさすがに確認はできないが屋敷に向かってきていることはわかる。

「ジル」

「…あ？」

声をかけたらジルは弟の頭をぐしゃぐしゃに撫でていたところだった。

どうやら彼は弟と数年ぶりに再会したことがやたらと嬉しいらしい。垂れ目のにやけ顔がなんだかむかつく、そうランは思った。

「めんどくさそうなの来るよ」

「え？」

「…っそつだよ兄ちゃん爺ちゃんっ、軍人が…」

「失礼するよ！アグネス卿」

シユウが思い出したようにその言葉を発した時、遮るかのようには偉ぶった声が屋敷中に響いた。

それに反応したシユウは、ジルを居間の奥に追いやるようには急いで移動させた。

窓の外に向いている視界からその3つの影が消えた後も、ランは庭を眺めていた。

良い天気だ、サリヤスには高い建物はほとんどないから空がよく見える。

濃紺の軍服はあの灰色の建物を、そしてその記憶にいつも存在しているあの人の、狂気のチラつく笑みを思い出す。

その記憶の残像を振り払うようにランが瞼を閉じると、居間に入り込む足音と、気配がした。

3人分の気配。

「おや、ロット大尉じゃありませんか。この老爺に何の御用かな？」
飄々と尋ねるアグネス卿の声。

(…ロット大尉？)

「村人から連絡があつてですねえ。広場で騒ぎを起こしたよそ者をあなたが連れて行つたらしいじゃないですか」

ランは閉じていた瞼を開け、横目でその声のする居間の入口付近を見た。

軍服の人物はやはり3人。

手前に小柄な中年の男がひとり、そして付き従うように後ろに佇む2人の男。

ひとりにはガリガリに痩せた線の細い男で、縁なしの眼鏡をかけている。そしてもう片方は筋肉…というよりも脂肪がたっぷり付いた丸々とした大男。

残念なことにランはその手前の男と顔見知りだった。

どうやらその男ははまだランに気付いてはいないらしく、アグネス卿とカナンや居間の奥にいるジルをちらちらと見ている。

ジルは拳を握り機嫌が悪そうであるが、カナンは煙草を片手に冷めたお茶を飲んでいて、その手前の男… ロットには眼もくれない。

アグネス卿なんて上品に笑い、我関せず、といった態度である。

それらの態度が癪に障ったのか、ロットは更に嫌味っぽく言葉を続けた。

「それに、この村を壊した張本人らしいじゃないですか」

その声は、ニヤニヤと意地の悪い色を帯びていて、彼の人の狂ったような笑い声とは違う、吐き気のような気持ち悪さが込み上げてくる。

なぜ今さらこんなことを思い出すのだろうか、ランは思った。

「ようやくこの村も立て直されて賑やかになってきたというのに… 恐怖に怯えた村人がまさか、私のところに来るなんて… そういうわけでこちらに足を運んでみたら、よそ者ばかりが集まっているじゃないですか。ねえ、アグネス卿？」

ロットは尖った顎で後ろの… おそらく部下だろう、2人の男に合図をする。

痩せた男と太った大男はのっそりと動き出し、ジルの方に向かおうとした。

「危険人物は捕まえておかないと…」

「うるさいな」

ああ、気分が悪い。そう思ったランは思わず声を発した。

自分で思うより、はつきりと。

「今さらその人を捕えたって関係ないはずだよ？」
言葉を発したランの方を向いたロットの小さな瞳が、大袈裟に揺れる。

眠そうに眼を細めるランを見て、目元の皺を一層深くして顔を歪ませている。

彼の部下2人は歩みを止め、その場に凍りついたように動かない。

「お前は…、その銀髪はまさか、エイミアード…中尉」

(事實は変わらない。私は確かにそこにいた)

「中尉？…ランが？」

そう呟くジルを無視して、ランはロットの部下を一瞥してから細めた眼でロットを見た。

その部下たちをランは見たことがない。だが2人の男はその場に立ち尽くしたまま、視線は明らかにうるたえている。

「エイミアード中尉、なぜこちらか？確かあなたは2年前に軍を辞め聖職にさがったと聞いていますが…」

「ちよつとね。あんたも出世したみたいだね、ロット少尉」

「今は大尉です。…エイミアード”元”中尉」

引きつった表情でロットはランを見据えている。

「それで？こんなことをするのは点数稼ぎ？出世すれば中央に戻れるの？あんたも大変だね」

「！」

ロットは顔を真っ赤にして怒る。どうやら凶星の様だ。

「6年前のサリヤスの事件は魔族の仕業って処理してあるはずだよ。」

それに、この人は私の連れで、危険人物なんかじゃない…人違いだよ」

「しかし！」

面倒だ、ランははつきりとそう思った。

「…人違いだよ、さっさと帰りな」

元々目付きの悪いランは細めた眼でロットを一瞥し、吐き捨てるようにそう言い放った。

近くにいたエリイは限りなく抑えた声でくすくすと笑っていた。

結局居心地の悪くなった軍人3人は屋敷を出て行ったのだが、微かにロットが呟いた言葉にランは一瞬身体が強張り、傍らの棒剣を咄嗟に掴んでいた。

ハルコートの犬…そう呟いていた。

そんなランの姿を見てジルは怪訝な顔を隠せなかった。

「駐在の軍に目を付けられたね」

「そんなの、元々です。僕らが居座ってからずっとですよ」

庭を抜けて足早に去っていく軍人たちを細めた眼で見ながら呟いたランに、カナンが煙草の煙を吐き出しながら答えた。

それを聞いてからランは身体の向きを居間の中央に向けた。ため息のような呟きが漏れる。

「まさか、駐在がああなロットとはね…」

「聖母さまは、ロット大尉と知り合いかね？」

さすがのアグネス卿も少し驚いた顔をしている。

「まあ…、私が国軍の外務庁に属していた時の部下です。大聖堂の聖母に正式に就任する前の数年間…私は軍人でしたので」

ランがアグネス卿にそう答えた時、ジルは落ち着かない様子でガタツ、と荒い音をたてて居間から出て行った。

そして彼が屋敷の庭を横切って行く姿が窓の外に見えた。

ランはそれを見て少し困惑し、それを察したアグネス卿は曖昧に微笑んだ。

軍人であったその経歴はジルには話してはいなかった。話す必要もないと思っていたし、そもそもジルの過去だってランは詳しくは知らない。

なぜあんなに慌ただしく屋敷を出て行ったのだろうか、そして彼はどこへ向かったのだろうか。

この村を訪れてからジルはずっと暗い瞳をしているのに。深い夜に迷って霞んでしまった月のような、金色で。

「聖母さまや、もし良ければ…この老爺の願いを訊いてはくれぬだろうか？」

アグネス卿のその言葉が正しくランの耳に入るまでに3秒ほど時間がかかった。

アグネス邸は村の外れに位置している。

その屋敷から少し歩いた、やや小高い丘の上に建つ屋敷と隣接する道場の様な平屋がある。

屋敷はアグネス邸より一回りほど小さい。少し外壁が崩れているように見えるが、屋敷自体に焼け跡はない。平屋は半分崩れていて内部が見える。

おそらく6年前の被害はこの丘には及ばなかったのだろうか…魔族の襲撃は別として、彼の炎は。

ランはその丘を登り、屋敷に近付いたところで平屋の前に佇む小柄な少年を見つけた。

その少年はただただじっと前を見据えている。

パキン、歩くランが足元の小枝を踏んだ音が響いた。

「…っ！」

ランはしまった、と一瞬思った。少年がびくつと肩を大きく震わせたからだ。

こちらを振り向いたその少年は先ほど広場で見た…確かセンと言ったか…その少年だった。

ジルを『化け物』と呼んだ少年だ。

センはランを見て少し驚いたが、すぐに丘を駆け下りて村の中心の方へ走って行った。

ランはそれを見届けた後、再び屋敷の方に歩みを進めると、平屋の中に見慣れた金色の頭が見えた。

「…ジル？」

ジルはその平屋の中心で寝転がって天井を見上げていた。

一面の床張り。もうずつと手をかけてないのか、埃っぽい。

ランが声をかけたら彼は眼だけをこちらにちらりと向け、また天井に視線を戻した。

暗い、眼だ。

「お前、軍人だったんだな」

「ああ、うん。2年前まで国軍の外務庁にいたから…」

「メルシャーナ？」

「そう…だね。中央にいたから」

ネイディア国軍は総務庁、外務庁、教務庁から成り立っている。

その外務庁の中央司令部にランは配属されていた。中央司令部はこの国の首都であるメルシャーナにある。いわゆる本部である。

「今は軍人じゃないのか？」

「外務庁には在籍してないよ。ただ、大聖堂とか教会は教務庁に所属するのが原則だから…外務庁から教務庁に籍が移ったことになるのかな」

「そんなのがあんのか、軍には」

「教務庁はそんなに知られてないからね。ユヅキとかは正式な教務庁の人間だよ」

「お前は？正式じゃないのか？」

「聖母は、ちよつと特殊っていうか、位置づけがちよつと難しいんだよね」

ジルは相変わらず天井を見上げたままだ。

「俺さ、軍人嫌いなんだよ。駄目なんだ、あいつら。だから、ランが元軍人って知って正直驚いた。でもさ、よく考えたら納得してさ……だってお前、全然聖職者っぽくねえじゃん？いくら能力者って言ったって女だし、ましてや大聖堂の聖母がなんであんな棒剣を振り回してんだって……まあ、外務庁にいたって聞いて全部つながったけどな」

ランは担いでいた棒剣を下ろし、壁にもたれかかって彼の言葉を聞いていた。

外務庁は、国軍の中では軍事力を担当している。

「サリヤスを出て行ってから、メルシャーナにいたんだよ。そこで遭った軍人は、俺とか……仲間たちをゴミ扱いしやがってさ、さっきの大尉みたいな奴らばっか。でもこの村を復興する手助けだったきつと軍がやってくれたんだろ？それ考えると複雑で、ちよつと頭冷やしてた。悪かったな、さっきは。勝手に出て行って」
そういつてからジルはやつとランの方を向き、控えめに笑った。

ジルがここにいるであろうということはアグネス卿に教えてもらった。

アグネス卿に頼まれたことを中々戻ってこないジルに伝えようとランは来たのだが、彼はランの経歴に驚いて落ち着かなくなり屋敷を飛び出して行ったと知った。

ジルは起き上って煙草を取り出し、火を付けた。煙草に火をつけるのはなぜかちゃんとライターを使うらしい。

どこから持ってきたのか彼の傍らには灰皿が置いてあり、新しい吸殻が溜まっている。

気付いてはいたが、なかなかのヘビィスモーカーのようだ。

「ここな、俺ん家なんだ」

この村を訪れた時から、いやそれ以前：サリヤスに向かうと決めた時からだ、彼の周囲にはただならぬ雰囲気漂っているように見える。

「剣術道場やっててさ…親父が師範。村の若い奴らは大体が親父の弟子だった」

この平屋は道場か…ランはそう思いながらジルの言葉に耳を傾ける。「村のみんなが仲良くて、家族みたいで、平和な村だったんだよ。」

…でもやっぱ、戻ってきちゃいけなかったよな。さっきの大尉が言っただ通り壊したのは俺だし」

「…違うよ、能力の覚醒だったんだから…」

「…ははっ」

無意識のうちに言葉を発したランにジルは自嘲的に笑う。

おそらく6年間ずっと、そうやって笑ってきたんじゃないか。自分を許せないままで。

そのまま、ジルは囁くような声でぼつりぼつりと6年前の事件のことを話し始めた。

惨劇、落ちた花冠、赤い記憶。

懺悔のように、噛み殺した声だった。

能力が覚醒する時、眠っていたエネルギーが一時的に爆発すると、ユヅキから聞いた。

もちろん覚醒した瞬間に力を制御することなんてできるはずもなく。その能力を自分自身がちゃんと向き合い、受け入れていかないと制御なんてできないのだ。

ジルはどうして、この人外の能力を受け入れられたのだろうか。

その力で、事故とはいえ故郷を壊したというのに。

彼はこの皮膚の下、身体の内部に蠢く異質な能力が、恐ろしくはないのか。

勝手に決められた宿命が憎くはないのだろうか。

ジルの吐き出す煙を眺めながら、ランはぼんやりとそんなことを考えていた。

「センにもすっかり嫌われたみたいだしなー。あいつ俺に懐いてたのに…」

「あ、あの子…さっきこの前に立ってじーっと見てたよ。ここの中を」

「…センが？」

「うん」

「ほんとか？」

「しつこいな」

「…そっか！」

ジルはいきなり笑顔になって、その周囲の空気も一瞬明るくなった。極端だな、とランは思った。

「そういえばさ、お爺さんにちょっと頼まれたことがあって…」

「爺さんが？ランに？わざわざ何を？」

ランはアグネス卿の頼み、とやらをジルにそのまま話すことにした。ジルは、黙って聞いていた。

話はさきほどのアグネス邸に遡る。

ちょうどジルが屋敷を出て行った直後だ。

『聖母さまや、もし良ければ…この老爺の願いを訊いてはくれぬだらうか？』

『…なんででしょうか？』

『一年ほど前から…あの大尉がこの村の担当になったのじゃよ』アグネス卿はゆっくりとした動きで新しいお茶をカップに注ぐ。

『わし等村人は守られている身じゃからのう、何とも言えないのじやが…』

湯気が漂うカップを傾けながら、アグネス卿は言葉を濁しつつぼつりぼつりと紡いだ。

要するに、こういうことだ。

国軍大尉ロットがサリヤス駐在所担当に就任してから、軍に納める税が跳ねあがったという。

それにより、ようやく復興を果たしたというのにも関わらず、村人たちの生活苦は続いている。

住人達は不満を溜めるも、6年前の魔族の襲撃事件のこともあり逆らえずにいるという。

現在この村に残っている住人だけでは魔族には太刀打ちできない。

だからこそ、サリヤスは国軍の統治下に入ったのだ。

…税が跳ねあがったときにロットは『軍が村を守っているのだからその額は当然だ』と言っただけらしい。

それに反発したとある青年が村外れで魔族に襲われかけたことがあり、それを退けたのはロットと部下だったという。

それ以来、誰一人として軍に反発はしなくなった。

『まあ、税が跳ねあがるなんてことは滅多にないですからね。おそろくロットが勝手にやったんでしょね』

ランは新しく入ったお茶を飲みながらそう答える。

『その、基準よりも溢れた分の税金は軍に入ってる…わけないですよね』

『駐在所止まりじゃろうな、おそろくはほとんどが大尉の手中じゃ』

『なぜ、私に頼むのでしょうか？』

『広場の祠を見たかね？』

『ええ、あの鉄製のものですね』

『あの祠は村の宝での。蛇神さまが祀られておるのじゃよ。村の者』

が何かを起こしたらあれを壊すと言われておる』

『ああ、だから…私なんですね』

サリヤスは蛇を祀る民族。

すぎるものがなくなるのは、つらく、不安定になり、崩壊してしま
う。

『僕らも村に厄介になっっている身ですので…自分からは乗りこめな
いんですよ』

カナンが申し訳なさそうに呟いた。

確かに、ランはこの村の者ではない。そして、元とはいえロットの
上司だった。

元軍人が間違った行為をする軍人を正すのは許されることである。

『そうですね…私もあの大尉にはいろいろ思うこともありますし
そう言いながら、ランは不意に思う。』

6年前の事件は、本当に終わっているのだろうか。

ロットやあの部下たちだけで魔族を退けられるのか。

『この話、ジルにしてもいいですか？』

『ああ、構わないよ。あいつならきつと自分の家にいるじやろっ
ほら、その丘を登ったところにある屋敷じゃよ』

「爺さんが…なるほどな…」

アグネス卿の頼み、それをジルに話し終えたところでランはジルの
横に腰を下ろした。

「そんな奴ら、俺達でちよちよいつとやっちまえばいいんじゃない
の？」

「ジル…話聞いてた？村の人が何か起こすと祠が壊されるんだって。
ジルはこの出身でしょ」

「…あ。そつか」

間抜けな声をあげるジル。

果たして彼はどの顔が本当なんだろう。こうして呆けている姿か、それとも酷く暗い目をしている姿か。

「私ひとりで十分だよ。それに…うまくいけば駐在担当から変えられるかもしれないからね」

「は？」

「こつちの話。…さっさと終わらせよう、ロットのことは」

ランがそう呟いた時、背後でカタン、と音がした。

その音は道場の入口からの音で、気配から誰かが入ってきたと思われる。

「…兄ちゃん」

「ああ、シュウ。いたのか」

「…気付いてたくせに、しらばっくれなくていいよ」

その言葉の通り、ジルは気配に気づいていたようで全く声にも音にも動じてはいなかった。

声の正体は先ほどアグネス邸で会ったジルの弟、シュウ。

彼はジルより背が低いが、顔立ちはよく似ている。ただ、ジルは金色の髪だがシュウは赤みがかった黒髪である。

「そんなこと言うなよ、久しぶりに会ったんだから。何だ？帰ってきたのか？」

「今は…ここには住んでないんだ。爺ちゃんのところ…」

シュウは目線を床に向け、道場の入口に立ったままだ。その手には白い柄の剣を持っている。

不釣り合いだな、ランは彼を見てそう思った。ジルと似た容姿をしていても、戦いは似合わない空気の間人だと思う。

「さっきラキア姉から家に電話があつて…これ、爺ちゃんが兄ちゃんに」

白い柄の剣をジルに差し出した。

それは繊細な蛇の装飾が施してあり、ジルが大聖堂で魔族に立ち向った際に折れてしまった玉虫色に鈍く光るあの剣と酷似している。あの折れた剣は確か大聖堂に置いてきたはずだ。よく見るとその白い剣は折れた剣よりも少し細身だった。

まあ、大剣であることに変わりはないのだが。

「ラキアが？ああ、爺さんに伝えたのか」

ジルはその剣を見てシユウに近寄る。

「わざわざ渡しに来なくてもちゃんと屋敷に帰るって」

はは、と笑いながらジルは弟からその剣を受け取るうと手を伸ばしたら、シユウは押し殺した声で呟いた。

「俺：兄ちゃんに話があつて」

それは微かな声だったが、ランの耳にははっきりとした音声で届いていた。

兄弟の話なら自分はいない方がいいだろう、そうランは思っただけで立ち上がった。

「ジル、先に屋敷に戻ってるよ」

「：ああ」

「聖母さま、にも：聞いてほしいんです！」

「：え？」

シユウが発した言葉にランは驚いて間抜けな声を出してしまった。思わず立ち止ったランと目の前にいるジルを交互に見ながら、シユウは早口で喋り始めた。

「俺、あの：カナンさんから聞いて、兄ちゃんの、あの日の不思議な力の事とか色々：！」

ジルは静かに弟の声に耳を傾けている。

「ずっと何が起きたとか全然わかんなくて：兄ちゃんもどこにいたかとかわかんないし：でも半年くらい前に村にやってきたカナンさんに色々聞いて、それで：。兄ちゃんのあの日のあの力はどうしょ

うもなかったんだって、誰にもどうすることもできなかったんだって…」

シユウは混乱しているようで、同じような言葉を繰り返して…そして謝罪を繰り返した。

そんな弟を見ながらジルは、何だか泣きそうな顔をしていた。

「それで、今まで6年間も村に寄り付かなかった兄ちゃんと一緒にいる聖母さまは…聖母さまも、たぶんきつと、同じような力があるのかなって思ってた…。カナンさんやエリイと同じ雰囲気、聖母さまからしたから…」

「よく、気付いたね。私も、あなたのお兄さんと同じ…能力者だよ」シユウはランの方を真っ直ぐに見て話をする。

正面に立ってよく見るとこの少年はジルよりも瞳が穏やかだ。

ジルと同じで若干垂れ目だが、ジルの瞳には鋭く突き射すような光が宿っている。

だから、この少年はジルと違って剣が似合わないのだ。そうランは納得した。

「兄ちゃん…ごめん、ずっと。探そうと思えば探せたのに…正直、怖かったんだ。兄ちゃんが全く別の人になっちゃったんじゃないかって…」

「…ばーか」

「うん、兄ちゃんは…兄ちゃんだ。おかえり…」

涙目になっている弟の頭をくしゃっと撫で、ジルは微笑んだ。

「で、それだけか？」

「え？」

シユウの様子が落ち着いた時、ジルは弟に向かってそう尋ねた。剣を背負うための金具を鞘に取り付けている最中だ。

「それを言うためにここに来たのか？まだ何かあるんだろ？」

「…気付いてた？」

「お前の顔見ればわかるよ。すっかりした顔してねえからな」

「実は…頼みがあつて…」

眠くて欠伸を噛み殺していたランは、その言葉に反応する。

…この村は頼みごとが好きなんだろうか？

「アリアが行方不明なんだ」

雲ひとつない晴天に浮かぶ太陽は、この古い道場と屋敷を痛々しく照らしていた。

2 - 4 聖なる印と傷跡と

8歳の時、マザーにナイフを取り上げられた。

それ以来あの人は私が刃物を手にするのを許したことはない。

10歳の時、酷い高熱と悪夢にうなされて、いつそ死んでしまいたいと思つたことがある。

『どうしてこんなに苦しいの？』

幼い私は育ての親にそう尋ねた。

『いつかわかり合える日がくる』

彼女は静かにそう答えた。

…私は”普通の人間”になりたい

ラン達がアグネス邸に戻つた頃、もう陽は暮れ始めていて空が闇に染まるまではそう時間はかからなかった。

ジルがサリヤスに寄つた用事はどうやら折れてしまった剣の代わりに剣を取りに来た、というものだった。

先ほどシユウから受け取つた白い柄の剣。

ジルの用事が終わった今、残りは駐在の軍人：ロット達を締め上げるだけだ。

だがもう外は暗く、闇が深くなりかけているので今日はもうこちらの屋敷に泊めてもらうことにした。

軍の駐在所へは明日行くつもりだ。

夜空に2つの月が輝く。ゆらゆらと、漂うように。

夜も更けた頃、ランはそれを見上げながら屋敷を出て庭にいた。

自身の片隅には愛用の棒剣を携えて。

私にいまだ刃物は許されていない。

「眠れないか？」

「…ジル」

背後から声がした。

彼は気配を消すのが上手い、そうランは思う。

「窓からここにいるの見たからさ。俺も外の空気吸おうと思ってランは1階の奥にある客間を借りていて、ちょうど彼女が座っているとそこはその部屋から出たところであり、大きな窓は開いたままでレースのカーテンが揺れている。」

確かジルは今夜はサラの部屋にいたと言っていた。サラが彼から離れようとしなかったのだ。

「…サラちゃんは？」

「ぐっすり寝てるよ。シユウもいるもんだから、俺の寝る場所がねえ」

ジルは少し嬉しそうな声色でそう答えながら、ランの隣に座った。出逢ってからずっと着ていた黒いロングコートを今は脱いでいて、彼は黒いタンクトップ姿だ。

首から右肩にかけて黒い刺青が大きく入っているのを、ランは今知った。

それは鎖と蛇がもつれ合い、同化している模様だ。

「熟睡なんて、ずっとしてないよ。能力を自覚してからは…上手く眠れたことはないから」

横に座ったジルを一瞥してから、ランは前に向き直りそう呟いた。

ジルは目を丸くしている。

「一度も？」

「うん。だって、ジルもそうでしょう？」

「…お見通しか」

ジルは肩をすくめて、そう言った。

「ぐっすり眠って朝起きた時に、この能力が全部夢だったらいいのに…ってずっと思ってたよ」

時折吹く風が開けっぱなしの窓に吊るされたカーテンを揺らす。

ランは上着を脱ぎ、衿元のリボンタイを解いたラフな格好をしている。

左手の手袋は、外されていない。

その腕を手袋の上から握り、ランは言葉を続ける。

「でもこの力がなくなったことなんてないし、もしも…眠ってる間に力が暴走なんかしたら…」

「暴走？したのか？」

ランはその華奢な身体を両腕で抱き寄せ、自己防衛をするかのよう
に曖昧に笑い、それから視線を落とした。

「私は”化け物”なんだって」

すぐ隣にいるこの人は、解ってくれるだろうか。

この、得体の知れない不安を。

「ジルは、能力が覚醒してから6年で…ちゃんと操れているでしょう？」

「まあ、そうなるな」

「私はまだ操れてない。覚醒したのは2歳って聞いてるから…もう17年」

「なっ…」

ランは自身の体温が徐々に下がってきているように感じていた。
それでも淡々とした口調で言葉を紡ぐ。

どうしてこんなことを話しているのかは、自分でもわからない。

大して、意味なんてない。

「私、兄さんと一緒にマザーに…ユヅキに拾われて、大聖堂で育った。拾われる前の事は覚えてないし、兄さんも教えてはくれなかったよ」

「その時、能力は？」

「もう覚醒してた。何度も何度も暴走しかけたし、能力を受け入れることも…制御も私にはできなかった」

ジルはたまに相槌を打ったり簡単な質問をする程度で、静かにランの話に耳を傾けていた。

この人と自分の境遇は似ているようで…似ていない、そうランは思う。

「私はこの能力が嫌い」

”平穏”と”普通”が欲しいだけなのだから。

「4歳くらいの時かな、マザーに連れられてある場所に行ったんだ。あんまり覚えてないけど…すごく大きな樹があった。そこで封印の契約をしたよ。その時のことは今でもよくわからないんだけど、治癒の能力だけを残して”憎しみ”が”覚悟”以外には能力が反応しないようにしたんだって」

「そんなことができるのか？」

「わからない。マザーが、時が来たら教えるって言ってた」

「あの人は何者なんだ？不老と延命処置に、この能力に関して詳しくすぎないか？」

「私もよくは知らないんだ。何度か聞いたことがあるけど、いつも曖昧に笑うだけだったから」

そうしてランはマザーと呼んでいる教母の姿を思い浮かべる。

17年間傍にいたけれど、何一つとして変わらない、不老の人。いつだって黒を纏い、微笑みを浮かべる育ての親。

ランは、ユヅキ・エイミアードのことをどれだけ知っているのだろうか。

風が吹き抜けて、ランの髪を揺らす。

腰まで伸びた銀色の髪は今は何にも遮られず、月明かりに照らされる。

「長いな、髪」

ジルはそう言って一房すくう。

ランの銀の髪を眺める彼の金の髪もまた、月に照らされてキラキラと光る。

彼は太陽の下の方が綺麗だと、ランはぼんやりと考える。

「元々は、瞳と同じで紺色だったんだよ…髪の色」

「染めたのか？」

「違う。突然…色が変わったの。それから元の色に染めようとしたって全く変わらないんだ。私が知っている限りのこの世界では、銀色なんて珍しい毛色だから…何処に行っても変な目で見られる。

それに…不吉の象徴だって、昔大人が言ってた」

「こんなに綺麗な色が、不吉な訳ねえだろ」

間髪いれずにジルはそう呟く。

彼の手はいまだランの髪を弄んでいるが、その言葉を聞いて不意にジルを見たランの瞳を真っ直ぐに見つめている。

その金の瞳は、正直だ。

左腕が疼く。

勘の良い彼はきつと気付いているだろう。この腕に”何か”があることを。

私が”普通”になれない最大の理由だ。

左腕の手袋に手をかける。

指をかけると、それは案外簡単に、するりと脱げる。

また瘦せたのかもしいれない。半年前はもう少しぴったりだった気がする。

この下にあるものを知っているのはほんの数人だ。

(マザー、兄さん、あとは…大佐)

ランは手袋を外す。ゆっくりと。

「能力を封印したって…これのせいで、苦しいままなんだ」

黒い手袋の下の腕は、青白く細い。

「それは、刺青…じゃないな、痣か？」

ジルの目が見開くのは思った通りだった。

まさか教務庁関係者、聖職者だといえど、自らの肉体に刻む者はさすがにいないだろう。

「刻印”だよ”

露わになった左腕の肘から下には、くつきりと大きな十字架の印が刻まれていて、それは大聖堂や各地の教会の印に酷似している。

その印の周りには無数の切り傷や刺し傷、火傷の跡が二の腕まで及んでいる。

これは生まれつきではなく、ランが6歳の頃に徐々に浮かび上がってきたのだ。

大聖堂教母のユヅキはこれを”刻印”と呼んだ。

ユヅキが取り乱した姿をランが見たのはあの時1回きりである。それは…この印がいかに特異なものであるかの証明でもある。

そして印が浮かび上がると共に変わった髪の色。

ランは、その事をジルに伝えた。

手袋を外して露わになったその細い腕を庇うように右手で掴みながら、ぽつぽつと言葉を紡ぐ。

「聖母って役職はね、この刻印を持つ人しかなれないんだって。厳密に言うと、初代聖母の方にも刻印があったからって伝えられてるからなんだけど」

だから、ランは6歳で既に”聖母”と呼ばれたのだ。

「物心ついたくらいに、自分が”普通”じゃないって気付いた。リオンの街にいる同じくらいの歳の子たちには、この印はない。兄さんにもない。大人たちは私を一步距離を置いて見る。聖母だとか…

聖なる娘とかつて呼ばれるのは、この印があるせいだ…。苦しかったんだ、私はどこまで周りと違うんだろって、普通になれない自分がいて…。それで、無意識のうちに左腕を切り付けてた。この刻印が憎くてしょうがなかったから。たぶんね、一瞬能力が解放されたりもしたんだと思うんだよね…。火傷みたいな跡があるから」

ランは火傷の跡を指さす。

ジルは悲痛な顔をして、彼女の左腕を、その大きな掌で包んだ。

「もう、いい」

ジルは呟く。

ランは、続ける。

「マザーは言うんだ。憎んじやいけないって。増えてく傷を見て、ナイフを取り上げて、刃物を禁止された」

「もういいから」

「聖なる娘だなんて呼ばれたくなくて、軍人になったよ。でも、私は”化け物”なんだって」

低くなる体温に、微かに震える腕。言葉は少しずつ早口になっていく。

「内乱があつた時に、隣にいた同僚が瀕死の重傷で、夢中で直しただけだったんだよ。みるみる治っていったその人は言ったよ、化け物…。って。人間の皮をかぶった魔族だって！もう、わかんなくなつて、能力が暴走しかけた…。私は何も憎んじやいけないのに！」

「そんな顔しながら、無理して話さなくていい！」

だんだん早口になるランに耐え切れず、ジルは怒鳴った。

そんな顔って、どんな顔？

自分を包む両腕は震えている。ジルが触れている左腕だけが、彼の体温のせいであちゃんと生きているように思えた。

「私はこの皮膚の下にある能力が怖い…。今でもまだ制御できるかなんてわからないよ。私はこんな力なんていららない、十字架なんていらぬ…。”普通の人間”になりたいだけだよ！」

ずつと言えなかつた言葉を、ランは吐き出した。

私は、こんなにも弱いのだ。

「ラン」

ジルはしばらく黙ってランの左腕の傷をひとつひとつ労わるように撫でていた。

無骨に思えた彼の掌は意外にも繊細で、大きく綺麗だった。

ランは抵抗することもなくぼんやりとそれを見ていた。

左腕を触られるのは、嫌いだったはずなのに。

そしてその沈黙を破ったのは彼の彼女を呼ぶ声だった。

「俺は、自分を人間だと思ってる。だれがどう言おうと、身体から炎が出ようと」

ジルの少しかすれた低い声が、静かな夜によく響く。

金の瞳は、ランを射抜く。

「だからお前も、人間だよ」

今まで私は、あまり深く人と関わってこなかった。

弱音なんて許されなかった。

楽しいことなんてなかった。

決められた運命の中で嘆いていただけだった。

ずっと引っ掛かっていた得体の知れない不安を吐き出した今なら、受け入れられるだろうか。

私も、進まなきゃいけないのに

「まあ、俺も化け物呼ばわりされてきたしな」
案外似た者同士なのかも、とジルは少し笑った。
ランの震えは止まっていた。

彼女はジルのにやにやと笑う笑顔を見て、さっきまでの自分の姿を
思い返して掴まれたままの左腕をぱつと振り払う。

「一昨日初めて逢った時はただの口の悪い偉そうな女だと思ってた
けど、こんなしおらしい部分があるとはな」

「……」

「いやー、びつくりびつくり。人は見かけによらないっていうか…
痛っ!!」

ランの腕はジルの頭にチョップをかましていた。

「調子に乗るな」

「…お前、絶対聖女じゃねえ!」

「それはありがとう」

「聖女はそんなに目付きが悪くないはずだ」

「うるさい垂れ目」

シリアスだった雰囲気が一変して、ふたりはくだらない口論を続け
ていた。

ガアンツ!!!!!!

突然の銃声が、夜の静寂を引き裂いた。

2 - 5 急襲 醜きは誰か

突然の騒音にランとジルは立ち上がり、辺りを見回した。

「何だ!？」

「ジル、誰がいる!」

ランが指さした、門の方から歩み寄ってくる人影。

そのすらりと細長いシルエットは甲高い声で叫んだ。

「んだよ、起きてんのかあ? さつさと始末する予定だったんだけど
な! あ」

周囲は暗く、光源は月明かりしかない。

そのぼんやりとした影はフツと消えた。

「動くんじゃないぞ」

ジルのこめかみには銃口が当てられていた。

背後には、先ほどの甲高い声の主であろう人影。

「お前がな」

ジルが不敵にそう笑ったら、彼の右腕から飛び出した炎の蛇にその
人影は咬み付かれ、炎上した。

ランとジルはすかさずその人影を包んだ炎から間合いを取り、それ
を見た。

「ひゃつはあ!」

悪趣味な甲高い笑い声が聞こえ、炎は徐々に消えていった。

その人影は、少しだけ煙を身体から上げているだけだった。

炎に照らされたその姿は、ジルの憎むべき相手。

細い身体、以上に長い手足、尖った耳、吊り上がった赤黒い瞳。

その左手には鋭い爪が伸びており、鈍く光っている。

しかし、右腕には掌が、拳がない。

そこには…銃が埋め込まれていた。

まるで、生きているかのように脈打って。

「ジル、魔族だ」

「わかってる」

「でも、あんな腕の…見たことない」

また銃声が響き、ランの頬をかすった。

「知ってるぜえー、この炎なあ。俺のこの右腕を焼き尽くしたやつだ」

その魔族は、ニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべながら目を見開き、甲高い声を発した。

「あの時より随分とぬるいけどなあーあ！」

再び銃を構え、今度は屋敷の方向へ銃口を向けた。

「まずい、爺さん達が！」

ラン達は広い庭の門の近くに寄っていた、ふたりのいる位置から屋敷への銃弾を防ぐのは難しい。

棒剣を構えたランはその持ち前のスピードで魔族に向かっていったが、間に合わない。またひとつ銃声が響いた。

銃弾は屋敷には当たらない。届いていない。

ランもジルも目を疑った。

その銃弾は、突然地面から盛り上がった土壁に当たった。

銃弾の衝撃に土壁は崩れはしたが、すぐに再生した。

よく見たら土壁は屋敷を丸く囲み、そのすぐ外側の地面は陥没している。

「屋敷は任せてくださいねー」

「カナン！」

土壁は1階部分を完全に隠していたが、2階から上は露出している。その2階の窓からひらひらと手を振るのは地の能力者、カナン。

魔族は繰り返し右腕の銃を放つが、すべてカナンの土壁によって防がれた。

土壁のないところに向けて銃弾を放っても、その度に的確な位置に土壁が延長する。

「すげえな…あいつ」

ジルは感嘆の声を漏らし、カナンの能力に圧倒されている。

「能力者は、金髪のカキ一人じゃなかったのか？」

甲高い声とは違う声が響く。

その声の主は屋敷の屋根に座って、こちらを眺めていた。

「おいパース。始末すんのは能力者のガキと銀髪の女だけだ。屋敷を壊すなって言われてんだろ」

「パール兄貴！」

パールと呼ばれたその男は屋根から飛び降りて、先ほどから暴れているパースという魔族の横に着地した。

(こいつも、魔族か)

ランはそう思っ、棒剣を構えたまま2人の魔族を見る。

容姿はパールもパースも区別が付かないほどそっくりだ。ただ、パールにはちゃんと両腕に拳がある。

「ああ、見覚えがあるな、その顔」

「兄貴！あの時俺の腕を焼き落としたやつだ！」

「うるせえな、わかってるよ。何だ小僧、訳わかんねえって顔してんな」

魔族の兄弟はジルを見ながらそんな会話をしており、兄のパールはジルに問いかける。

ジルは、拳を握りしめ、口を開いた。

「お前ら…俺を知ってるのか？」

「知ってるか…だと？はっ、笑わせるぜ。俺はお前の事を忘れた日なんてねえぞ！」

弟、パースがジルに向かって叫んだ。

ジルは青ざめ、ちょうどその時隣にいたランの方を見る。

「ラン…俺、知らないうちにあんな奴に惚れられてた!？」

「…ばかじゃないの」

「だって俺の事忘れた日なんてないって！」

「そういう意味じゃないっての！」

なんでこんな状況でジルはふざけていられるのかと、ランは不思議に思った。

「…俺はお前をぶつ殺しにきたんだよ！」

パースがこめかみに青筋を立てて言う。

どうやらランとジルの会話が耳に入り、更にその内容が癪に障ったらしい。

ジルは面白がってけらけらと笑っている。

「お前は忘れていているようだがな、俺たちは6年前に起きたこの村の事件の生き残りだ」

パールは鋭い爪を光らせてそう言った。

その隣にいるパースが右腕の銃を構えるのが見えた。

ランは、飛び出した。

咄嗟に飛び出したランは、同時に2人は分が悪いと思い、銃を構えたパースを右脚で蹴り飛ばして遠くに飛ばした。

「痛えな、この…!!」

パースが体勢を整えようと立ち上がりかけたところで、ランは彼の背後に回り、その首に棒剣を突き立てて銃の埋め込まれた右腕を掴んだ。

用があるのは、この腕だ。

「聞きたいことがある」

「何だあ？女、お前やたらと素早いじゃねえか」

パースは吊り上がった赤黒い眼でランを舐め回すように見下ろす。気分が悪い、ランは顔を歪める。

「あんたさ、この銃…誰が埋め込んだ？」

「ああ？関係ねえだろ」

「さつきそこで拾った銃弾、あんたのでしょ？これは…国軍の支給品と同じものだ」

「何が言いてえ？」

「あんた達は、私達がここにいるって誰に聞いた？始末しろと命令したのは、誰？」

出来れば当たって欲しくない予想が、ランの頭を占める。

「別に、噂も情報もそこら中に溢れかえってんじゃねえか。俺らはその一つを聞いてやって来ただけかもしれないよ？この村を壊滅させたガキが帰って来た、なんて村中の噂だからなあ！」

パースは抵抗することもなく、ニヤニヤと嘲笑っている。

細身とはいえ、相手は男であり、魔族。ランはパースの右腕を抑える自身の腕に更に力を込める。

「なら、あんた達が私を始末しに来る理由があるの？さつき言っただろう」始末するのは能力者のガキと銀髪の女の2人だけ』って」その言葉に、パースの睨みがぴくつと動き、再びランを鋭く捉えた。その表情からは、笑みが消えている。

ジルと対峙していたであろう兄パールが突然近付いてきて、その鋭い爪がランの喉笛に伸びた。

それに気付き、咄嗟にパースから離れたランは喉をかする程度で済んだ。

「教えてやろうか、女」

パールはランの前に立ちふさがり、言う。

パースよりも落ち着いた印象があるが、それでも粗暴なものの方だ。

「俺たちに始末を命令したのは、大尉のジジイだ」

「…やっぱり」

「何だ、気付いてたか。それにしちゃあ、予想的中で嬉しいって顔してねえな？」

「軍人と魔族が手を組んで嬉しいものか」

パールは口元を斜めに上げ、嘲るようにして笑う。そして、空を見上げる。

浮かぶは今日も、白銀と赤の二つの月。

「直に来る」

「…？」

「6年前の悲劇の、再来だ！」

パールは夜空を仰ぎ見ている。

（再来：？6年前の？）

何が起るといふのだ。

今この村にいる能力者達は既に能力の覚醒を終えている。

魔族の襲撃、赤い月。しかし、月は満ちていない。

：そんなものは関係ないのか。

「伝説が繰り返すのか？」

「さあな？俺達は言われた通りに始末するだけだ！」

パールが突っ込んできた。

ランはギリギリでそれをかわし、間合いを取る。

（パスより速い！）

幸い、ランは門の方向に跳んだ。

行けるか。

「ジル！」

ランは少し遠くでパスと対峙しているジルを呼んだ。

「ジル、この場を任せてもいいかな？」

「は！？」

「この黒幕は大尉だ！あいつをどうにかしないとキリがない！それに、気になることがあるんだ」

ジルは目を見開き、驚いた顔でランを見たが、その隙を突いて跳びかかってきたパスに炎の蛇をけしかけるのは忘れなかった。

「しょうがねえな、行けよ！」

ジルの声を合図にランは踵を返して村の中心に向かって走り出そう

とした。

だが、パールの長い腕がすぐ近くまで伸びていた。

「行かせねえ！ここで死ね！！」

棒剣を構える前に振り下ろされた腕、遮ったのは黒髪。黒いワンピース。

キインツ、金属音のような耳障りな音。

「行って、聖母のお姉ちゃん」

パールのその腕を止めたのは、幼いエリイだった。

「エリイ！？」

「カナンが行行って。あたしは大丈夫だよ、心配しないで」

エリイはそう言って、屋敷から持ってきたであろうジルの白い大剣を左腕で持ち主に向かって投げた。

彼女のもう片方の腕は、盾の様なものに変化していた。

持っているのではない、腕自体が変形している。

あれは、何。

しかし、エリイの腕のことを考えている余裕はない。

「ありがとう！任せるよ」

軍の駐在所は村の外れ、アグネス邸のちょうど反対側にある。

ランは夢中で走った。

走りながら仰ぎ見た空、赤い月に見張られているような……ランはそんな気分になった。

駐在所は小ぢんまりとした、小さな建物だった。

ランが辿り着いた頃、扉の前には濃紺の軍服に身を包んだ男が2人立っている。

昼間見た、痩せこけたひよろひよろの男とでっぷりと太った大男だ。
(普通なら、一人が番をすれば十分だろうに)

やはり今夜何か起こるんだろうかと、ランは胸騒ぎを感じた。

「ああっ！あんたは…！」

「うるさい、邪魔」

警戒もせずに2人の前に飛び出したランは、細い男を片脚で蹴り飛ばし、大男の喉元に棒剣の先端を当てる。

その大男は腰を抜かし、地面に尻もちをついている。

ランは細めた鋭い眼でその男を真っ直ぐに見下ろす。

「ロットは、いる？」

「あ…は、はいっ！中に…いらっしやいます」

「そう、ありがとう」

ランは棒剣を引っ込めてその大男を解放した。どうせ襲ってはこないだろう。

女であり、まだ子供だったとはいえ、彼女は実力で中尉にまでなったのだから。

向かってくるのはただの命知らずだろう。

「あれが…ハルコート大佐の聖女…？」

ランが扉を開けて駐在所の中には入る時、そう呟く声が聞こえた。

ロットのいるであろう部屋はすぐにわかった。

小さな建物の狭い廊下の奥の扉、その扉だけが閉まっていた。

ランは扉に近付き、ノックをした。

「何だ？」

「……」

「…誰だ？」

問いかけに答えずに黙っていると、すぐに苛立った声がした。

扉の反対側から近付いてくる足音が聞こえ、ドアノブに手をかける気配がした。

なんて無用心なんだろうと、ランは考えた。

「…!？」

扉が開いた瞬間に、ランは身体をねじ込み、ロットを蹴り飛ばして倒れたところに棒剣を突き立てた。

「くんばんは、大尉」

ロットの顔は見事に引きつっていた。

「なぜ…お前が、ここに…!」

ロットは皺の刻まれている顔でランを見上げて言う。

その目の前に突き立てた棒剣に刃はなくても、この男の恐怖心を煽るには十分だ。

ランに睨まれたその小さな眼は、動揺してきよるきよると左右に動いている。

「素敵な客人をありがとう、大尉」

「な、何のことだ？」

「アグネス邸に魔族を送り込んだのはあんだらろう？あいつらが言っただよ」

「…っ!あやつら、軽々しく言いおって…」

「あんな魔族2人だけで私たちを始末できるとでも？随分と軽く見るんだね」

「ふん、ハルコートに守られていただけのお前なんぞ…っ!」

ガンッ!!

”ハルコート”

その名に反応したのかランは、棒剣を一旦引いてすかさずロットを押しつけている壁、彼の顔の真横に棒剣を突き立てた。

衝撃でパラパラと壁が崩れる。

「その名を言うんじゃない」

ランのその反応を見てロットは口元を斜めにする。

「無駄な口叩いてないで、質問に答えて。どうして魔族と手を組んでいる？」

「あの”悪魔”と同じような体術を使って、よくその名を呼ぶなど言えるな。そうやって人を見下すのも、有無を言わさず蹴り飛ばす

のも、あいつにそっくりだぞ…エイミアード」

「あの男の話はしないで。質問に答えな」

「お前は今もまだハルコート飼いの犬だろう？」

「違う！」

優位に立っているのは、ランのはずだ。

なぜ、こんなにもロットは落ち着いているのか。

先ほどランが部屋に入り、時間が経つにつれて彼は落ち着きが増している気がする。

「…魔族の腕に、銃を埋め込んだのはあんたか？」

「……」

「答える！」

黙るロットにランは怒鳴る。

ロットはランを見据え、ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべる。

こんな奴に冷静さを見失うなんて、ランは焦る頭の隅でそう思う。

「終わりだ、エイミアード」

ロットが口角を上げて呟いた。

途端、ランの背筋に冷たく走る気配。

どうして気付かなかったのか。こんなにはつきりと感じる殺気に。

「知りたいことは、僕が教えて差し上げましょう」

冷たい、声。

「知った後で貴女は生きてはいないでしょうが」

首に回された腕。指先には鋭く伸びた爪。まさか。

ランの首を掴む腕の主は、軽々とロットからランを引き離し、遠ざけた。

そしてそのまま、壁に押し付けられる。

衝撃で息が詰まる。少しだけ、血を吐いた。

「もう、一人…いたのか」

「不出来な弟達に貴女方を始末できるとは思えませんでしたので。僕はこちらで待たせてもらいましたよ」

依然ランの首を掴んだままのその男は、先ほどの魔族の兄弟とそっくりな容姿をしている。

ただ、あの二人と比べたら丁寧で穏やかな物腰。

しかし冷たい瞳は彼らより鋭い。

「はじめまして、お嬢さん。僕はパージ、先ほど失礼したパール・パースの三つ子の兄でございます。以後お見知りおきを」

「パージ！さつさとそいつを片付けんか！」

ランの棒剣から解放されたロットがいつの間にか移動して、部屋の奥にある執務机の辺りで叫んだ。

腕には銃を構えている。

こいつなら撃ちかねないかと、ランはロットを一瞥してやけに冷静に思った。

「黙りなさい。僕は貴方に指図されるつもりはありませんよ」

魔族、パージの冷たい瞳がロットを捉え、そう告げる。

その態度を見てランは疑問を口にする。

「仲間、じゃないのか？」

「仲間？我々魔族が只の人間などという下等な存在と仲間であるはずがないでしょう。そうですね、利害の一致…といったところですか」

パージは淡々と話し続ける。

ランは今も首を押さえ付けられたままなので抵抗すらできない。

ロットはパージの一睨みによって銃を撃つ気を完全に失ったようだ。

「この大尉は金と地位が欲しい、我々は力と技術が欲しい…ただそれだけのことですよ」

「力と、技術…？」

「魔族の世界に銃火器を生み出す技術はございませんので、この大

尉を利用させていただいたのです。この村は6年前の事件のこともあって魔族には抵抗しませんからね。僕らが潜伏するにはちょうどよかったのです。おかげでパースの腕も再び使えるようになりましてよ」

パース、腕に銃を埋め込んだ…魔族。

「あの腕は…まるで生きているみたいだった」

「生きていますですよ。その証拠に、脈打っていたでしょう？」

「何が…目的？」

「力が必要なのですよ。」あの方”のために」

ランを見据えるパージの瞳は赤黒く冷たい。

さっきの兄弟と違ってパージには隙が見当たらない。抵抗ができない。

「そろそろ、お別れをしましょうか」

こんなところで、終わるわけにはいかない。

ランの首を掴む腕とは逆の、空いた腕が動いた。

鋭く伸びた爪が左肩に突き刺さった。

「…っ！！！」

鋭い痛みが走った。

それは爪かと思っただら手刀だった。ランの肩からは真っ赤な血が流れている。

「この程度で倒れてもらっては困りますよ」

押さえ付けられていた首の腕が外れた隙に、ランはパージを蹴り上げようとした。

しかし、彼の腕に脚を掴まれ、それは阻まれる。

「貴女の体術のパターンなら大尉から聞いています。蹴り技もその棒剣も、僕には通用しません」

脚を掴まれたままで棒剣を回して攻撃を仕掛けたが、パージの言葉通り一切効かなかった。

ランの動きは完全に読まれている。

(どうついたらいい。…このままでは、やられる)
ランの足元には血溜り。

左肩の傷は結構深いようで、出血が止まらない。

パールが言っていた。

『 6年前の悲劇の再来』と。

ここでこの魔族を止めなければ、それは確実に起こってしまうだろう。

何が起こるかなんて、見当もつかないけれど。

ランは身に付いた体術と愛用の棒剣を手にひたすら攻撃を仕掛けたが、全くパージには効かない。

運よく当たっても、かすり傷だ。

その間、パージの攻撃はランに当たる。

一番酷いのは手刀による左肩の傷だが、確実に傷は増えている。

「…っああ!!」

さっきの手刀で今度は脚を刺される。

血は流れ続ける。頭がくらくらする。

「さて、這いつくばっては逃げることもできないでしょう」

ランは床に伏した。

立てない。

床が赤く染まっていく。

パージはランの顎を掴み、顔を上に向かせる。

「諦めた眼をしてみてくださいませぬ」

「誰が、あなたなんかに…やられる、か」

「こんな有り様で何をおっしゃっているんですか。立ち上がることもできないでしょう?」

絶えず流れる血は、左腕を赤く染める。

ランは自身の左腕をふと見て、手袋を外したままだったことに気が付いた。

新しい傷なのか、古い傷なのか、わからない。

ランは、人間だよ。

こんなに綺麗な色が、不吉な訳ねえだろ。

ジルの言葉が、頭をよぎる。

今なら、受け入れられるだろうか。

力が、欲しい。

負けない、力。

護り抜く、力。

自分の存在を認めてくれたその人の、大事なものを。

護りたいと、願っているんです。

首から下げた黒い十字架を、微かに動く左手で握りしめる。

祈るように。

「立ち上がれなきゃ…動かなければ…いいんだ、よ」

（私に、ちからを、

与えてください）

ランは静かに眼を閉じた。

そして、眩しいほどの光が彼女を包んだ。

2 - 6 覚悟 十字を背負え

微かな記憶を辿って、力の感覚を思い出そうとした。

ランは強く眩しい光に包まれ、床に伏せたままとてつもなく大きな圧力に耐えていた。

「…何です、この光は…!？」

近くにいるはずのパージの声が、遠くに感じる。

力が欲しいと願った。

今度こそ、受け入れようと思った。

この光は…己の能力だと、ランはわかっている。ただ制御ができない。

このままだと自分の力に押し潰されてしまう。

それだけではなく建物ごと破壊してしまいそうだ。

(どうすれば…いい?)

ランの能力が解放されても、今までそれは全て爆発を引き起こしてきた。

「…頼むよ、暴れ…ない、で！」

ランがそう呟いた時、彼女を押し潰そうとしていたその光が一層大きく発光した。

開いた眼に、映る部屋。視界はもう白くない。

先ほどまで血の流しすぎでクラクラしていたランの身体は、不自然に軽くなっていた。

(出血が、止まってる…?)

ランは伏せたまま、左腕を見る。

流れていた血はもう固まり、腕にこびり付いている。

新しい血は流れていない。

「目くらまし…かと思ったら、それでもなかったです、ね…」
立ち上がったランはパージの方を向く。

彼は片腕が黒く焼け焦げていて、こちらを睨み付けていた。

「お嬢さん、能力者だったんですね。貴女から発せられた光に触れたかと思っただら電流みたいに痺れましたよ」

おかげさまで腕が焦げてしまいました、とパージは言って、その焦げた腕を見つめた。

途端、その腕を切り落とし、投げてきた。

「!?!」

「差し上げます。どうせ使い物になりませんから」

「…それであんたも銃を埋め込むの?その腕に」

「そうですね:僕は銃はあまり好きではないのですが、そうした方が良さそうですね」

残った方の掌をばきばきと鳴らし、パージは平然としている。

この魔族は痛覚が鈍いのだろうか、ランは思う。

もう光は治まっている。

不自然に軽い身体と止まった出血が、自身の光の能力を解放させたことを意味しているのだろうか。

「能力者なら、少し厄介ですね」

パージはそう呟いて、勢いよくランに飛び込んでくる。

ランはすかさず棒剣でその腕の攻撃を防ぐが、反撃しようにも相手の繰り広げてくる攻撃に防戦一方になる。

能力を使わない限り攻撃は当たらないだろう。

今は一時的に傷を塞いでくれてるのは解放の反動だろう。

ランは自分の傷は癒せない。移し替える対象がないからだ。

爆発、電撃。制御しきれない今、手放しにそれを放つのは危険だ。

ならば。

「防ぐのが精一杯ですか?能力者とはこのようなものなのですか!」

パージの言葉に反応するよりも、意識を己の内側に集中させる。放つより、具現化だ。

イメージするんだ。

（受け入れてやる、もう怖くない）
銀色に光る棒剣が、パージを弾いた。

ランの首から下がる、黒い十字架が揺れる。

大聖堂の住人たちは皆ロザリオを下けているが、黒い十字架を下げているのはラン以外には教母ユヅキと、ランの兄の3人だけである。それはユヅキから与えられたものであり、左腕の十字の刻印と違って、疎ましいと思ったことは一度もない。

「十字架で、裁きますか」

「…聖職者だからね」

細かい装飾が施され、鈍く銀に光るランの身の丈ほどの棒剣は、通常はその名の通り棒状である。

今、その棒剣の上部、横に垂直に走る光の刃。
電流のような、ただの光源のような、細かく振動して不安定に形状を保っている。

それは、大きな十字架だ。

ランの棒剣は具現化した光の能力によって十字架に変化している。

「光の能力は…浄化する力でもあるって言うてたっけ」

昔、力を封印したときにユヅキから教わったことだ。
魔の力を裁き、浄化する。

ランは棒剣を振るい、パージを壁に飛ばす。

スピードが、増した。棒剣が軽い。

壁に叩きつけられたパージの身体が一部、十字に溶けているのがわかる。

「その十字は、我らを邪と判断しましたか…！」

パージが叫ぶ。

十字が浸食して、皮膚が溶け、ただれていく。

「思いあがるなよ、人間！神にでもなつたつもりですか！」

ついに冷静さを失ったパージはランの目の前に一瞬で移動し、彼女の喉元に鋭い爪を立てる。

しかし浸食が止まらず、立ち上がるのもままならないのか跪いたような体勢をとる。

「貴女方人間は神になどなりえない、神は我らを見守っていらつしやる！」

パージは今にもランの喉を刺しそうだが、指はそこから動かない。

「今に」あの方”がおいでになる！その前座としてこのサリヤスは再び血の海となるがいい！」

血の海、その言葉に反応してランは棒剣の十字が交わる角をパージの首にかけるようにして床に拘束する。

パージは焦点の合わない眼で宙を見上げている。

「そんなことは、させないよ」

ランがそうパージに告げた時、目の前のその魔族の様子が変わったのにすぐ気付いた。

動揺しているような、狂ったような叫び声をあげる。

「ああああああ！！！！そんな、まさか……！！！！」

十字の浸食は胸元から始まっていたが、今はもう顔まで広がっている。

パンツッ！

パージの、頭が破裂した。

ランは、何もしていない。棒剣で拘束していただけだ。

「安心して。君のせいじゃないよ」

窓の外から声がした。

闇の底から聞こえるような…不気味な声だ。声色からは、男のよう

だ。

「その役立たずはおしゃべりすぎてね。いらぬことまで話しそうだったから僕が今潰しちゃったんだ」

「誰だ！」

ランは開いた窓に駆け寄り、外を覗いて声の主を探すが、誰もいない。気配もない。

「君がなかなか封印を解放しないから焦っちゃったよ。解放しないなら村を壊そうかと思ってただけど、もういいや。君の能力は見れたし、もう欲しい技術はもらったしね。サリヤスからは手を引いてあげる」

「出てこい！」

「まだ、駄目だよ。君をまだ殺すわけにはいかないからね。じゃあね、神に愛された…聖なる娘」

ランは窓際に駆け寄ったまま、外をぼーっと見ていた。

部屋の中は散々だ。

崩れた壁、倒れた本棚、血溜り、魔族の死体。

いつの間にか存在を忘れていたロットは執務机の陰で気絶している。

「ラン！」

部屋の扉が勢いよく開き、剣を担いだジルが飛び込んできた。その姿は血と泥にまみれている。

怪我は、なさそうだ。

「うわ、こいつもか！」

ジルは床に伏せている魔族…パージの死体を見つけ、驚いた。

「こいつも？」

「俺達が屋敷の外で相手した2人の魔族いるだろ。とどめは刺さな

いで縛りつけといたんだけど…さっき突然頭が破裂してよ」

「それ、きつと…」

ランは先ほどの不気味な声についてジルに話した。

その声が言っていた、サリヤスから手を引く、ということも含めて

「なるほどな…」

ジルはポケットから煙草を取り出し、火を付ける。

『神に愛された聖なる娘』その言葉がランの思考を占める。

神？

彼女は聖職者であるが、属する大聖堂教義は神の存在を認めていない。

己の心を信じる、そんな信仰だ。

神とは、何だ？

そしてパージの言っていた”あの方”とは。

大聖堂を襲ってきたあの魔族が言っていた”あるお方”と、何か関係があるのか。

(私の封印の解放を待っていた…?)

わからないことだらけだ。

「なあ、その十字架…何だ？」

ジルが棒剣を指さして聞く。

「あ…封印、解いたから。能力」

「覚悟、したんだな」

「まあね。そのおかげで気になることが増えたけど」

「考えるだけ無駄だろ。今は進むしかねえよ」

なるほどそうか、ランは妙に納得した。

とりあえずはここでの用事を済ませなくてはいけない。

ロットを締め上げるだけの予定だったけど、まさかこんな酷い有り様になるとは思わなかった。

ランはロットの執務机の上に腰掛け、その上に置いてある電話の受話器を取る。

記憶しているダイヤルを回す。

「ラン…？真夜中だぞ？」

「大丈夫、絶対出るから。あ、そいつ縛りあげといて」

時間を心配するジルにランは微笑み返し、ロットに脚を向ける。

能力の解放によって一時的に傷を塞いでいる彼女は、意識を集中させないと今にも倒れそうだが先に用事を済ませることにしたのだ。

ジルはどこから取り出したのかロープで楽しそうにロットをぐるぐる巻きにしている。

『…誰だ？真夜中だぞ』

「あんたの元飼い犬だよ」

『ああ…ランか。何の用だ、薬が切れたか？』

「人をジャンキーみたいに言わないでよ。仕事だよ」

『お前に頼んだ仕事はないはずだが…』

ランは受話器の向こう側に向かってけらけらと笑いながら話している。

ロットを縛り終えたジルは黙って煙草を吸っている。

「サリヤスの駐在担当が魔族と手を組んでいたのをたまたま見つけてね。軍の支給品の銃を奴らに回してみたんだよね。今すぐ連行してよ、あと新しい駐在担当も用意して、ちゃんとした人を。」

…え？担当の軍人も魔族達も縛りあげてあるよ。ただし魔族は死んでるけど」

『殺したか？』

「私じゃない。そのことは今度話すよ。だからすぐに人を寄越して」

『わかった、すぐに手配しよう』

「頼んだよ。あー、あんたは来んなよ。大佐！」

ランはそう言い放って乱暴に受話器を置いた。

ジルはランの方を向いていた。

「…大佐？」

「元上司。中央の軍に連絡したから、朝には来ると思うよ。このことを処理してもらわなきゃなんないからね。まあ、ロットは確実に

除籍だね。いや…牢屋かな」

そう言った後、ランは集中力が切れ、力が抜けた。再び傷口から血が流れ始めた。

「ランお前、その傷！」

「今頃、気付いたの？ちよつと血が足んないんだよね…」

「つーかやばいだろ！え、ちよつと…カナーン！！」

「やだよあんな胡散臭い科学者…改造されそう…」

「いいの？」

「もうこの村には用はないよ。あの娘が能力を解放したから、復活にまた一步近づいた」

「刻印を持つ、聖女ね」

「そう…対極の存在にして、一番強い繋がりを宿した娘。まあ、本人は何も知らないんだけど」

「あたしも何も聞いてないわ」

「知らなくていいことさ。今では僕と…ユツキだけが知っている。彼女にとっては悪夢だろうけどね」

「あなたにとっては？」

「知る必要のないことだよ」

ふたつの人影は、山の頂上付近でふもとの村を眺めている。

「僕も質問しよう」

「何かしら？」

「君にとってあの村は？」

「…知る必要のないことだわ」

片方の人影がくすくすと笑う。

「裁きの十字架か。”彼女そっくり”だな」

人影は、闇に…溶けていった。

ジルによってアグネス邸に運ばれたランは、カナンの治療を受けた。どうやらカナンは科学者でもあるが、医者としての多少の知識と技術は持ち合わせているらしい。

2日ほど寝込んだ彼女が起きて早々に心配したのは改造されてないか、だった。

それに対するカナンの返答は「そんなあ、まだしませんよ」というものだったので、その場にいた全員がその笑顔に少しの恐怖を覚えたのは言うまでもない。

ランをカナンに託した後、ジルは魔族の死体をひとまとめにし、駐在の軍人も3人合わせて縛り上げて駐在所に置いたままにしておいた。

朝になって到着した中央からの軍人たちを出迎えたのはアグネス卿だったらしい。

卿はランが寝込んでいることを伝え、ジルから聞いた事の顛末を伝えた。

その後重要な証拠として魔族の銃が埋め込まれた腕の写真を数枚撮った後でその死体は嚴重に葬られた。

おそらくこれでようやく、6年前の事件は終わったのだろう。

ジルに復讐するために村の近くに潜伏していた魔族の兄弟とロットが手を組んだ。

それが、全てだ。

「だーから、何にも必要ないってば！」

「しかし…エイミアード中尉！」

「もう中尉じゃないっての」

「聖母さま、メルシャーナまでお送りしますので、乗ってください！」

「別にいいってば。自分の足があるんだから」

「しかしハルコート大佐のご命令でございます！」

「それなら……」

サリヤスの村の入口付近で、濃紺の軍服の男達と言い合いを繰り広げているのは灰色の神父服を羽織ったランだ。

彼女の左肩と脚の包帯ははまだ取れていないが、もう十分に休養はしたといってサリヤスを離れることにした。

2日間寝込んだ後、5日はベッドに拘束されていたためランは不機嫌極まりない。

カナンによると、能力の封印を解いたことによって自然治癒能力が高まり、治るスピードは常人よりもぐんと速くなったという。

といっても酷く重傷だったランは胡散臭い科学者の治療を受けざるを得なかったのだ。

彼女は濃紺の軍服たちに向かって睨みを利かせている。

「乗ってくださいますか！？中尉…いえ、聖母さま！」

「絶対、嫌」

不機嫌な彼女は、拳銃の果てに軍人のひとりを蹴り飛ばし、その場を離れた。

向かった先には黒いロングコートを着たジル、そしてサラ、シユウ、アグネス卿。エリイとカナンもいた。

ランは手荷物のトランクを持ち上げ、棒剣を担ぐ。

「もう治療は受けないからね」

ランはカナンを睨んで言う。

当のカナンは煙草を吸いながら微笑み、にやりと笑う。

「だったらもう怪我しないでください。次こそ…改造しますよ」

その言葉にエリイはくすくす笑っている。

そして無邪気に笑ってランの腕を掴む。

「ラン、またね」

「僕らも、研究と…準備が終わったら、合流しますね」

カナンとエリイの2人の能力者は、それだけ伝えて屋敷へ戻って行った。

「さて、行くか」

「思ったより長居したからね」

煙草の煙を吐きながら、家族に手を振るジルの表情が固まった。視線は、遠くだ。

「ジル…兄ちゃん!」

「セン」

思わず啞えていた煙草が落ちる。

「…行ってらっしゃい!」

少年の声が響く。

しばらく呆然と立ち尽くしていたジルは、屈託のない笑顔で手を振った。

変人科学者の治療によって不機嫌だったランの心も、少し晴れた。

覚悟は決まった。

もう、迷わない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0938s/>

WING 哀しみの翼

2011年6月27日02時02分発行